令和5年度教育研究自己点検評価委員会報告書

横浜市立大学

令和5年度自己点検シート【Plan Do Check Action】 <国際教養学部>

			Plan			Do	Check	Action
項人	Ⅰ 日V糸口	2 課題	3 到達目標	n+ #n	4 スケジュール	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7次年度の取組に向けて
目 A 教育	【教育の質向上】 ・きめ細やかな学修指導を行うことで 学びの質の向上を図る ・成績評価の平準化 ・卒業研究の質の向上 ・研究倫理教育による研究不正の抑止	・TeamsのおよびYCU Boardの活用が十分になされていない。 ・シラバスの記述についてばらつきが見られる。 ・成績評価に偏りが見られており、科目群、学系間の評価を平準化していく必要がある。 ・卒業研究の審査体制およびプロセスについて昨年が完成年度であったため、改善すべき点が散見された・チェックリスト型の研究倫理教育にとどまっている。 ・各学系において実習系科目と関連科目の連携について不十分さがある。	S評価20%以内の目標遵守) ・卒業論文提出プロセス、審査プロセスの改善 ・2、3年時の研究倫理教材の改善 ・実習科目の科目間連携の精査	通 1 前 通 通 年 月 後 年 年	成績評価調査 学部独自の研究倫理教育の実施 FDの実施(カリキュラム設計)	・YCU Boardへの記入指導を各ゼミで 行うよう、周知した。 ・次年度シラバスチェックについては 国総群全体で実施することとなったため、学部独自のシラバスチェックは実施せず。 ・科目群ごとの成績評価状況について調査を実施した。 ・学部独自の研究倫理教育(チェックシート方式)を実施した。 ・カリキュラム再編を予定し、それと連動した学部FDを検討したがカリキュラム再編の検討が中断されたため、リベラルアーツ教育に関するFDを実施する(2月)	・YCU Boardの目標入力状況は前期時点では、31.4%と国総群の中ではもっとも高かったものの、後期の入力状況は8.5%と大きく低下した。・前期成績においては前年度平均GPAが3を上回った5科目(少人数科目を除く)のうち4科目において平均値の低下が見られた。	
B 研 究	【研究力の向上】※研究科のみ記入							
C特色出し	【特色を出す取組】 ・グローバル人材育成およびリベラル アーツ教育を特色としたカリキュラム 再編 ・人文社会系におけるデータサイエン ス教育のあり方検討		し、現行カリキュラムの課題洗い出し	8月 ~10月 前期	カリキュラム再編に関する学部内FD 来年度カリキュラムの検討(ADEPT対 応等) 卒業生の履修科目およびカリキュラム 評価アンケート結果の分析	・学部のADEPT科目の見直しを行い、 都市課題実習の追加について検討した。	・来年度ADEPT科目の追加(都市課題 実習I)を行う。 ・新旧(R1、R4)カリキュラム評価ア ンケートの比較を行い、全体の満足度 は向上していることが確認された。一 方でカリキュラムポリシーの認知度な どについては課題があることがわかっ た。	・カリキュラムポリシーなど、オリエ ンテーションにおける履修指導のあり
D共通課題	・英語教育の充実 ・英語による専門教育の充実 l	題(申込時期とシラバス公開時期のズレ)プログラムの不十分さなどの課題・PE取得後のAPE履修促進などの課題	・APE受講者数10%増(昨年度実績の べ329名) ・GSPプログラム修了者数の増加(昨年 度4名→20名)	4月	GSPの見直し APEに関する履修指導(オリエンテーション) 現行GSPプログラムに関する履修指導	・昨年度から引き続き国際教養学部の グローバル教育に関するWGミーティ ング(全7回)を実施 ・WGでGSPの見直し案を作成した。 ・1年生を対象にグローバル教育に関 するオリエンテーションを実施した (1月)	・留学者は94名(昨年度実績111名)から減少した。ただし、自己手配留学者は24名(昨年15名)と増加・GSP修了者は前期時点で5名(昨年度は通年6名)今季登録者は92名・APE受講者数は1414名(昨年度1490名)と減少した。	・引き続き留学者増に向けて取り組む ・GSP見直しに向けて取り組むと同時 に履修指導を行うことで、修了者増を めざす。
	【リカレント教育】 ・研究科と同じ 【研究科の定員管理と大学院進学率の向上】※研究科のみ記入							

		T I I I I DO ONCER MEN	Plan			Do	Check	Action
項 枝	1 取組	2 課題	2 四字口冊		4 スケジュール		6 成果	
目番	1 収組	2	3 到達目標	時期	内容	- 5 改善に向けた具体的取組	0 风米	7次年度の取組に向けて
A 教 1 育	【教育の質向上】 · YCU-Boardの利用に関する教員アンケートを実施し、課題やGood Practiceを発見する。 ・学生にも利用に関するアンケートを実施し、課題を発見する。	・教務関連の重要な情報が、学生に届いていない。	・多くの教員がYCU-Boardを利用する ことを通じて、学生も日常的にアクセ スする循環を作る。	前期末前期末後期始	教員アンケートの実施 学生アンケートの実施(A3、C1と同時実施) アンケート結果の報告、課題等の共有	学生とのコミュニケーションが円滑に 進むよう、問題があれば教授会等で共 有した。	大きな問題は無く、学生に届くべき情報が届いていたと判断した。	YCU-Boardの利用をより促進するため、「卒業論文の電子ファイル提出への切り換え」の検討を始める。
A 教 2 育	【教育の質向上】 「データサイエンス人材育成プログラム(国際商学部)」を実施し、R6年度に数理・データサイエンス・A 教育プログラム認定制度(応用基礎レベル)の申請を目指す。	・新プログラムにつき、円滑な運営と申請に向けた準備が課題である。	・プログラムの円滑な実施 ・「データ志向」をディプロマポリ シー、カリキュラムポリシーに取り込 むことの検討	4月 前期末 通年 通年	新入生オリエンテーションでの周知 プログラム修了可能者数の確認 R6年度申請に向けた書類等の準備 2ポリシーの再検討	スケジュールに従って活動を行った。	し、 入学生全員(296名)が参加し	今年度の実績を基に、数理・データサイエンス・A 教育プログラム認定制度(応用基礎レベル)の 申請を行う 。
A	・学生の多角的な評価を見据え、 卒論 選択必修化を検討する。	・DeepLやChatGPTの登場により、レポートや卒論、外書購読に対するこれまでの評価方法は見直しが迫られる。・専門の深化やDSのような新しく身に付ける素養により、学習すべき内容の増加している。	・プレゼミAの改善案の提供 ・レポート等の評価方法、卒業要件に	前期末後期始	学生アンケートの実施(A1、C1と同時実施) アンケート結果の報告、課題等の共有	今年度はプレゼミAに関して重点的に	・プレゼミAの開講時限を月〜金の	継続課題となった プレゼミAの講義内 容および 卒論の選択必修化 について議 論を深める。
B 研 1 究	【研究力の向上】※研究科のみ記入							
出	および、申請方法変更の効果検証 ・学生のニーズ調査を行い、プログラムの在り方を検討 ・DS関連プログラムを含めた履修シミュレーションを行い、領域横断Pの 履修可能性を精査	・領域横断プログラムへの参加者が少ない ・DS関連プログラム開設による履修者の分散化 【参考:R2~R4(前期まで)の参加者推移】 リーダーシップ:29→25→28 医療イノベ:28→31→42 起業家人材:17→18→24	・申請方法変更による効果検証の報告 ・学生アンケート及び履修シミュレー ションを通じて、領域横断Pのあり方 を提言	前期	オリエンテーション等での周知 申請方法変更による効果を確認 学生アンケートの実施(A1、A3と同時実施) 履修シミュレーションの実施	スケジュールに従って活動を行った。 また、医療イノベは COI-NEXT と連携 する形に内容を修正した。 医療イノベーション 経営管理 人材育成 プログラム→ 医療イノベーション人材 育成プログラム	商学部生)。 リーダーシップ:28(24)→72(57)	数理・DS・AI教育プログラムも含め、 様々なプログラムが開かれている。 引 き続き 参加者の推移を見守りながら、 プログラムの内容など検討を続ける。
D 共通課題	【グローバル教育】 ・ 国際商学部の グローバル人材像に適う 英語力 の再検討 ・APE IV (Business)の履修を促進	・PE合格最低点であるTOEIC 600点の 妥当性	・国際商学部生が獲得すべきTOEICの得点 レベルの設定 ・コロナ後の本格的再開に向け、海外派遣 者数の設定 <u>(国際商学部開設年度目標の年間留学者100名/1~4年次合計)</u> ・前年度を上回るAPE履修者数を目指す 【参考:R2~R4の履修者推移】 APEI : 98→126→144 APEIV (Business) : 12→22→34	通年	オリエンテーション等での履修促進 TOEICレベルの検討 海外派遣者数の再設定の検討	オリエンテーション等で履修促進を行 うとともに、PE・APE改革検討WGの 内容を元に教授会で議論を行った。	海外FW: 13→57	英語で講義される専門科目も増えている。これらの履修者数も併せて、国際 商学部の英語教育について検討を続ける。
3	【リカレント教育】 研究科と同じ 【研究科の定員管理と大学院進学率の 向上】※研究科のみ記入							

	Plan					Do	Check	Action
項枝	Ⅰ 日V糸口	2 課題	3 到達目標		4 スケジュール	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
目番	【教育の質向上】	_ pive		時期	内容 2022年度後期式続公本の共有	0 3(C) -1 307 / C)(T) R3-P()(E)	0 130313	· // // // // // // // // // // // // //
A 教育	1.現カリキュラムの評価、見直しの必要性検討 2.YCU-Boardの効果的活用法の検討	1.現カリキュラムの評価、高校の学習 指導要領への対応の必要性の有無 2.YCU-Boardを十分に有効活用できて いない 3.成績分布に偏りがあるケースが有	点の検討。新学習指導要領の変更点の	8月	善点の検討 卒業研究取得の最低基準について FD 前期成績分布の共有	3.成績分布について、分野や科目で不適切な差がつかないように、各分野での平均を教授会で共有するとともに、大きく差がついた科目については担当	ているが、まだ十分活用しているとは言えない。 2.理学部開講科目の履修者に偏りがないことを確認できた 3.成績分布について、情報共有することで均衡化をはかった。 4.生命環境分野で3年次発表会や卒研中間発表を導入し、卒研の質向上につな	1.理学部独自のデータ関連科目設置の 検討 2.卒業研究の質向上の検討
B 研 1 究	【研究力の向上】※研究科のみ記入							
C 特色出し	ログラムへの来年度採択に向けた準備	1.英語科目導入によるPE合格率変化の 検証、後期入学学生の意識調査 2.理数マスターの修了者数の向上 3.進路選択プログラム採択に向けた実 績作り	1.一般入試入学生のPE合格率調査。後期入学生の成績評価。 2.理数マスター修了生5名以上を継続できる仕組みづくり。 3.進路選択プログラム採択への実績作りのためのイベント実施。	9月	PE合格率、成績等の調査・評価 理数マスターガイダンス 理系進路選択イベント 理数マスター進捗報告会	2.理数マスター進捗報告会や年度末修 了報告会などを行った。 3.女子中高生への理系進路選択促進プ	という形で表れた 2.今年度の理数マスター修了予定者は8 名(DS学部生1名を含む)であり、着実 に増えている 3.女子中高生への理系進路選択促進プ	1.女子中高生への理系進路選択促進 (JSTプログラムが採択された場合)
D 共通課 題 2	【グローバル教育】 1.2Qや長期休暇を利用した海外派遣プログラム参加者を増やす必要性 【リカレント教育】 1.研究科に協力する形で行う。	1.昨年度は目標20名に対して、把握分が12名であった	1.2Qおよび長期休暇などを利用した <u>短期留学または語学研修などの</u> 国際経験率の向上(<u>全学年を対象に</u> オンラインを含んで <u>今年度</u> 20名以上を目標)。	年内	オリエンテーションで推奨プログラムの紹介 理学部推奨2Qプログラムの検討グローバル推進室と協力して渡航プログラム、オンラインプログラムの参加誘導	1.理学部開講の基礎ゼミクラスにおいて、アドミ職員による海外渡航プログラムの周知を行った	1.グローバル推進室が管理している範囲で、今年度の海外渡航プログラムの参加者は、2Qが4名、夏季・春季短期留学が2名の合計6名であった。一方、来年度交換留学予定者が4名おり、今後の向上を期待したい。	
3	【研究科の定員管理と大学院進学率の 向上】※研究科のみ記入							

令和5年度自己点検シート【Plan Do Check Action】<データサイエンス学部>

			Plan		Do	Check	Action	
項 枝	I 目√3□	2 課題	3 到達目標	n+ ++n	4 スケジュール	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
目置				時期	内容			
A 教	【教育の質向上】 文科省認定プログラムのADEPTプログ ラムとデータサイエンス人材育成プロ グラムの運営	・プログラムの参加および修了の申請 可能期間が特定の期間しかできないた め、確実にその期間に学生の申請行動 を誘導する	・プログラムの参加申請率の対前年比での 確実な向上 ・データサイエンス人材育成プログラムの 修了要件見直し		全学部のオリエンテーションでの周知 徹底 前年度参加学生の状況を分析し「DS人 材育成」の修了要件の改訂 学生の履修科目状況に応じた個別フォロー実施 複数教室でのリモート中継運用での TA/SAや事務支援チームの活用で円滑 運営方法を確立する	影する同時配信を実施。TA/SAを各教室に配置して質疑可能な講義形態を実現 DS人材育成プログラム:	ADEPTプログラム: 在学生の35.3%が履修 (令和5年度目標23%) DS人材育成プログラム: 受講者割合 62.9%達成	ADEPTプログラム: 次年度は全学部の1年生への同時実施可能な時間割調整が不可能となり、DS 学部生向け以外はオンデマンド型配信 授業形態へ変更も、全学生の履修が可能な方法を工夫する。 DS人材育成プログラム: 引き続き受講率の向上のための周知とフォローを徹底していく
育 2	【教育の質向上】 データサイエンスは方法論の学問的追求のみではなく、実社会の課題に対して価値を提供することが求められていることをしっかり教育し、社会に求められる人材を輩出していく	・企業との協力関係の維持・担当教員への負荷集中	・PBL入門での講演企業数の確実な確保	4月 6~7月 夏休み 後期		PBL実習: 前年度の協力会社15社のうち5社が離 脱するも、新規に5社の協力取り付け て学生派遣実施。	PBL入門(旧DSセミナー):	り運営している。特定教員への負担が 大きく、その教員が離脱すると実施が 困難となる。 負担軽減方法と、複数教員による実施 体制の構築など、持続可能な運営方法
B 研 1 究	【研究力の向上】※研究科のみ記入							
C 特 色 出 し	【特色を出す取組】 教育での産学連携の維持継続	企業提供データの学生による無断流出 リスク	データの外部持ち出しができないように、 学生個人PCへのデータコピーを禁止した 上で、学生の個人PCからデータ分析可能 な環境	8月 後期	ICT推進担当の協力を得て、情報演習 室環境を活用した擬似プライベートク ラウド環境の運用準備 R6年度授業実施に向けたテスト	企業提供のデータ流出防止方法などの 課題についてICT推進室と打ち合わせ を実施し、R6年度の実施方法を決定。 グループワークで使用する機材を購 入。	R6年度実施準備完了: 2年必修科目なので、2Qクォータプログラム対応のために前期前半での集中講義方式で土曜日に開講とする時間割とし、それに合わせた協力企業の参加スケジュールも確保。	新データサイエンス学部(支援1)の 設置準備。特色出しと運営体制の具体 化。 研究科補充人事との学部教育連携。

令和5年度自己点検シート【Plan Do Check Action】<データサイエンス学部>

			Plan			Do	Check	Action
項 枝 目 番	I 日V 糸口 I	2 課題	3 到達目標	時期	4 スケジュール 内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
D 共通課題	 【グローバル教育】 ・海外FW1件の実施による学生の現地への派遣(8月) ・SUDP2023への学生参加(8月) ・IACSCタイ大会への学生参加(8月) ・GCI主催のワークショップへの学生参加(8月ないしは来年3月) ・2Qにおける学生の留学 	・現地における国際交流の強化 ・オンラインによる国際交流の促進	以下、学習能力向上、スキルアップ、英語力強化などを目標; ・海外FW1件の実施による学生の現地への派遣と現地校の学生や研究者との交流・SUDP2023への学生参加とIACSCメンバー校の学生や研究者との交流・IACSCタイ大会への学生参加・GCI主催のワークショップへの学生参加・2Qにおける学生の留学参加・	通年	 ・海外FWへの学生参加は8月28日~31日予定 ・SUDP2023(8月23日~9月1日予定) ・IACSCタイ大会(8月31日予定) ・GCI主催のワークショップ(9月もしくは来年3月の予定) ・シンガポール国立大学などへの留学(2Q) 	国際交流の継続的実施をした。主な取り組み内容は以下の通りである。 ・8月にSUDP2023 (タイ・タマサート大学での実施) への学生参加があった。	・卒業論文の要旨を英語でまとめることで学術的な英語力を養った。 ・交換留学生を受け入れることで、学部の国際化に努めた。 ・GCIの提供する授業(SUDP)に参加することで、IACSCメンバー校の学生との交流が促進された。	・SUDP2024への学生参加は8月予定 ・IACSCフィリピン大会への学生参加 は8月予定 ・卒業論文の英語要旨を継続する。 ・国際学会への学生参加を促す。 ・海外FWやJSTさくらサイエンスなど、海外大学との交流を検討する。 ・国際ワークショップやシンポジウムへの参加を促進する。 ※SUDP・・・Sustainable Urban Development Program ※IACSC・・・International Academic Consortium for Sustainable Cities
2	【リカレント教育】 「研究科と同じ」							
3	【研究科の定員管理と大学院進学率の 向上】※研究科のみ記入							

		Plan				Do	Check	Action
項 枝 目 番	Ⅰ 月V 糸口	2 課題	3 到達目標	 時期	4 スケジュール 内容	- 5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
A 教 1	【教育の質向上】 ・4/19臨時教授会でFD実施 ・分野別評価通信の発行 ・作業チームを中心に自己点検評価書 を作成する。	・医学部医学科を挙げての取組が求め られるため、機運を醸成する取組を左 記のとおり実施するが、結果が未知 数。	・滞りなく前回受審時より指摘事項が 少ない形で受審を終了すること(認証 結果来年度以降の予定。) ・評価基準と実際の運用に照らして課 題がある点を順次改善図る。	4月 5月 6月まで 通年 11-12月	FD開催、広報誌発行、検討費配分 主任教授ヒアリング 自己点検評価書作成 課題改善対応 受審	・左記のケジュールに記載した内容を 実施したことに加え、直前期には教職 員及び学生向けに勉強会を実施した。 また、教員管理職とも領域ごとの個別 勉強会を複数回開催した。	・2回目の受審ということもあり、1巡	・令和6年度中に評価結果が確定する 予定であるため、指摘事項の振り返り を行い、改善に向けた取り組みを進め る。
A 教 2 育	・病棟実習部門会議等を活用して、教 員研修を実施 ・教員、学生からの日々の問い合わせ を踏まえ使用方法のノウハウを蓄積す る。		・CC-EPOCが浸透し、教職員が日常の中で違和感無く使用できており、学生も課題を把握し、その改善に向けて取り組むことができている。	通年	会議等を通じた周知、日々のフォロー	・9月の北海道大学より講師を迎え、 CC-EPOCで何ができるか?をテーマ にFDを行った。	・CC-EPOCを使用して2年目となり、 教員も使用に慣れ、浸透し始めている。 ・医師養成課程として適切な教育資源 を有しているか、経験した症例、手技 の蓄積が可能になった。	・医学教育分野別評価での評価結果を踏まえ、活用を検討する。
A 教 3		きない。	・高等教育推進センター教学IR部門と 連携し、課題となっているテーマの分 析、提案を行う。	通年	①IRワーキングでの検討、調査②教授会での分析結果の報告③結果を踏まえたアクションプランの提案	・昨年度に引き続き、国際総合科学群と分析項目を合わせるなど、連携して対応している。 ・医学教育分野別評価でも示唆のあった基礎・臨床の統合授業の拡充等を検討するため、科目間の相関を分析することを検討している。	試の取組について、医学教育分野別評	・医学教育分野別評価での評価結果を 踏まえ、体系的な情報収集、分析、立 案が行えるようIR機能の充実を図る。
研究倫理教育	・リサクラハンドブックを活用した研 究倫理教育の明示及びコンテンツの充 実 ・1年次後期グループプログラムで議 論	研究倫理に関する科目が体系化されていない。	研究倫理を踏まえたリサーチマインドが涵養されている。	4月まで 8月まで 後期	①eAPRIN (必修)、研究倫理に関するオンライン授業実施(大学院授業の開放) ②リサーチクラークシップにおける、研究倫理教育の実施 ③1年次プログラムで実施	左記スケジュールに沿って、 ・リサーチクラークシップにおいて、 研究倫理等に関する講義を受講必須とした。 ・リサーチクラークシップ前に、研究 倫理や研究にかかわるコンプライアンスについて理解させるため、eAPRINの受講時期を早めるとともに、4月中の受講を必須とした。 ・4月に行われた新入生研修においても、モラルを扱う講演の中で、研究不正について触れるとともに、一年次後期グループプログラムでモラル(具体的なテーマはグループごとに設定)をテーマに討議、発表した。	ラークシップ前の研究倫理教育の充実 を図ることができた。 ・低学年時から問題意識を醸成するこ とができた。	・医学教育分野別評価での評価結果を踏まえ、研究倫理教育のさらなる充実を図る。

			Plan			Do	Check	Action
項 枝 目 番	I 目V ※□	2 課題	3 到達目標	 時期	4 スケジュール 内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
E C 特色出し	【特色を出す取組】 ・能動的学習の指導力向上を目的とした海外FDへの教員派遣。 ・能動的学習の要素を伴う授業を新たに担当する教員への、海外FD受講教員による支援 ・11月の医学教育分野別評価受審に向け、教員の同評価への理解や参加動機を高めるためのFD実施・新たな推進体制FD・SD委員会の運営を医学教育センターと連携し効果的に行うほか、高等教育センターを通じた国総群との連携推進を図る	・多忙で不規則な勤務体系で動く医師 のための受講機会の確保。 ・FDコンテンツの他学群との共有。	・FD受講率85%以上 ・FDが、医学教育分野別評価受審に向けた教員の資質向上や、同評価への理解に寄与している状態 ・海外FD等の受講者の知見が、能動的学習の授業など教育の現場で活かされている状態 ・学生参画に関して方針が示されている。 ・IRで扱うデータ収集に関して方針が示されている。	通年 4月 10月 通年 2月	対容的な会議運営 医学教育分野別評価FD実施 海外PBLーFDへの教員派遣 FD・SD受講成果の現場への還元 目標受講率の達成	教員のため、講座のオンデマンド配信 を行った。	外FDが高評価を得た。当該報告会を 2/7に開催。 ・学生参画に関しては、医学科は従前 より「教養教育」「基礎医学」「臨 床・病棟」の各部門会議で行ってい る。	・令和5年度からFD・SD委員会が発足。初年度の経験を踏まえFDのみならずSDを含んだ企画・運営及びそのための効果的な会議運営を行う。・目標受講率の維持のための取組を行う。・海外FDおよび学生参画については引き続き行っていく。・IRについてFD受講数(率)を軸として具体的に分析を進めていく。・医学教育分野別評価での評価結果を踏まえ、更なるFDの充実を図る。
D 共通課題	【グローバル教育】 ・高等教育センターグローバル教育班において、次期中期計画におけるグローバル化方針を検討する・学生からのフィードバックについて、現在求めているものの目的と内容を精査する・コロナ禍前の量的レベルに戻りつつある学生派遣について確実な運営を行う。 ・交換留学生受入れを再開すると共に、私費留学生の受入れの在り方につ	レポートなど学生からの提出物の種類が多いながら、十分に活用しきれていない・コロナ禍前になかった手続きや課金があり、手続き量や経費負担など学生への負荷が増した。 ・ほとんど辞退のない交換留学生に比して、私費留学生は応募数が多いにもかかわらず辞退率が高く本学において	れている状態及び学生満足度80%以上2コロナ後及び戦争リスクを踏まえた危機管理体制の検証を踏まえ、誓約書や学生への事前告知が整理されている状態33年ぶりの留学生受入の運営が見直され、今後の受入れ方針が整理されている状態4学外団体との良好な関係が、次年度の支援に繋がっている状態	①前期 ②通年 通年	全学でのグローバル化方針出し ①学生からのフィードバック収集方法の整理、②改善案の企画 運営実績振り返り 学外団体との交流、学外団体主催イベントへの学生参加 プログラム休止中の交流大学との協議	を聞く等、情報共有の場として活用できるようになった。 ・感染症対策等、コナ以前より増えとしてが事前準備にかかる手続きについてはないの手続きについて改善を不断に行っている。 ・派遣経験者にいるの学生派遣を不断に行ってよる報告会を通じてので流が、なの学生派遣をでいる。 ・私費留学生の受入れについては、今年度から一時休止をしていた協力による。 ・私費の大利については、今年度から一時休止をしていた協力による。・なり、おいたはよる。	本字字生の評価シートを新たに作成。 リサクラ終了後に本学での受入れ教員 にフィードバックすることで 多面的	・グローバル展開について、"量から質 へ"を掲げる第4期中期計画の元、派遣 プログラム(派遣先大学・機関)の効 率化を目指した見直しを行う。 ・「私費」留学生の受入れについては 引き続き休止する一方で、「交換」 学生の受入れについては、受入れた留 学生を各診療社についでは、受入れた配置するだけではなるだけではなる。 ・派遣については参加した学生や受入れ機関(大学)から、受入れについてはるが変流を促進する。 ・機関(大学)から、受入れについては留学生自身、受入れた各診療科、対してアンケートを行い、PDCAのサイクルを回し、更なるプログラム改善を図る。
2	・オリエンテーションを利用した受講 勧奨(前期・後期) ・カリキュラム全般でEBM教育を実践 するため、教員向けのオリエンテー ション等を活用して周知していく。	・カリキュラムがタイトでADEPT科目 の受講が難しい。 ・EBM教育を実施しているが見えにく い。	・受講勧奨により、前年より多くの学生がADEPTプログラムを受講できている状態 ・EBM教育を基盤とした講義・実習の実施	4月、9月 通年 通年	①ADEPTプログラムの受講促進に向けた、受講勧奨②前年より多くの学生がADEPTプログラムを受講できている状態③EBMの教育の理解促進	後期のオリエンテーションで仕組みの 説明と受講勧奨を行った。	・診療現場でのEBMの重要性を理解した上で参加できるようになったが、医	・医学教育分野別評価での評価結果を 踏まえ、診療現場でのEBM教育の実践 方法を検討する。
3								

				Plan			Do	Check	Action
項	枝	1 取組	2 課題	3 到達目標		4 スケジュール	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
目	番	1 40/10	2 环烟	3 到廷日保	時期	内容	3 以音化同 77 亿共体的联温	0 PX.A	「人牛及の状態に同いて
A 教育	1	・対面授業への移行による教育の質の担保 (データ思考や創造を見い出す科目を強化)	・対面を基本とすることによる、学生の教育の質保証の機会の減少 ・データ思考および創造力の意識が少ない ・新カリキュラムの学年進行に応じた教育方法と内容の検討が必要である ・1年生の留年率が高い(10名)	デマンドを効果的に併用し、学生の教育の質保証を目指す・授業・演習・実習にアクティブラーニングを90%以上取り入れる・新カリキュラムの教育内容を充実させる・看護師・保健師国家試験の合格率が100%である・卒業研究を完了した学生が100%であ		・対面講義、ZOOM講義、講義のオンデマンド配信など3つの方法で効果的な授業を行う・アクティブラーニングを積極的に取り入れる・教室の整備と点検を行う・新カリキュラムの学年進行に応じて教育の方法と内容を再検討する・共通教育の検討・国家試験受験・進級判定	・新学期オリエンテーションにてデータ思考や創造性ある学びについて説明した・対面授業の実施、ZOOMやオンデマンド授業を併用した・講義・演習・実習科目のうち90%の科目でアクティブラーニングを取り入れた授業を展開した・1年生履修の共通教養科目時間割の検討を行い、教育推進課、PEセンターと調整を実施した・教室設備を点検し、不良な設備の修繕を実施した・教室設備を点検し、不良な設備の修繕を実施した	・1年生必修科目を履修できる時間割が作成できた ・1年次開講のキャリア形成看護学実習・ ベーシック I (金沢区のフィールドワーク)で課題把握を踏まえて新たなケアの創	
C特色出し		【特色を出す取組】 ・オリエンテーション、Teams等により、看護学におけるデータ思考の重要性を教示し、ADEPTプログラム履修を勧奨する	・ADEPTプログラムの履修率が低い	るADEPTプログラムについての重要性を周知する・広報を行う・1年次生のADEPTの履修率20%以上を目指す	10月~ 1月~	・新入生への新カリキュラムオリエンテーションを行う ・Webサイトやパンフレットなど広報を充実させる ・共通教養運営会議と連携しながら申請手続きを進める ・共通教養運営会議と連携し次年度時間割作成を検討する	・新入生オリエンテーションにてADEPT プログラムの意義説明と科目の履修勧奨を 実施した ・ADEPTプログラムの参加登録の勧奨 ・後期開始時にADEPTプログラムの終了 申請、科目履修の勧奨を実施した ・ADEPTプログラムと看護学のロード マップを作成した ・次年度科目の時間割の調整を実施した ・2025年度の履修率向上に向けて、教務 委員会や教授会で検討した	 ・新規参加者数は41名(R4年度4名) ・修了者は4/108名(R4年度0名)であり、3.7%と目標の20%を達成することができなかった ・ADEPTプログラムと看護学のロードマップが完成した ・ADEPT科目の時間割調整は難航したが、推奨科目を設定できた 	・看護専門科目をADEPT科目に追加することを検討する ・ADEPTプログラムと看護学のロードマップを用いて履修を勧奨する・総合講義(データサイエンス入門)を看護学科の推奨科目とする再掲 【特色を出す取組】・オリエンテーション、Teams等により、看護学におけるデータ思考の重要性を教示し、ADEPTプログラム履修を勧奨する
C特色出し	2	・『キャリア0.』による学生自らが「目指す		リオが、看護学科におけるOBEの枠組 みとして整備される	4月~ 6月~ 7月~ 12月~ 2月~	・前年度実施の予備調査の分析 ・予備調査の分析結果の評価と学内外 への周知 ・学生対象(認識、活用状況)、教員対 象(科目の位置づけ)のアンケート調 査の実施 ・アンケート調査の分析と評価、OBE の枠組みの検討 ・OBEの枠組みの提案、学内外への周 知	・学内外に『キャリア0.』ならびにOBEの 取組を周知・情報発信	・在学生・卒業生を対象としたアンケート 調査にて(n=145)、「役立つ」との回答は全 項目で9割を占め、高い評価を得た ・保護者説明会でOBEの取組を紹介し、参 加者から「学生支援が充実している」との評 価を得た ・学生と教員が協同して学術集会にて横浜 市立大学のOBEの挑戦について交流セッ ションを開催し会場から高い関心を得た ・看護学科ホームページで主要な取組を紹 介した ・専門科目における『キャリア0.』の位置 づけの明確化に向けた検討を開始した	・OBEの定着とさらなる展開的活用に向けて取組を継続していく ・新学期ガイダンス等の機会を活用し 『キャリア0.』をOBE指標として明確に位置づけた周知を行う

			Plan			Do	Check	Action
項 枝	Ⅰ 目 2 日 日 日 日 日 日 日 日 日	2 課題	3 到達目標		4 スケジュール	┃ - 5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
目番			·	時期	内容	o other in restit as with	G 73321C	7 X 1 /2 7 X X X X X X X X X X X X X X X X X X
C 特色出し	【特色を出す取組】 ・新カリキュラムの進行に向けて、横浜市内の保健医療福祉機関と連携して、看護教育の質の維持に向けて検討する ・キャリア形成実習、看護の統合と実践の検討を行う ・看護実践の場で教員が関わる地域貢献の機会に希望する学生が参画できる	検討を要する ・感染拡大のため、学生が多様な場で学ぶ 機会が縮小しているが、教員の看護実践の	様な看護実践の場が維持できる ・看護系センター設置検討WGの活動を 通し、教員が関わり学生も参加できる		・新カリキュラムでの教育に向けて、 実習予定施設などとの協議を開始する ・看護系センター設置検討WGにおい て検討し、教員が関わり学生が参加で きる看護実践や地域貢献の機会を集約 し可視化する	・次年度実習施設の検討 ・看護系センター設置検討WGでの検討 ・文部科学省への実習施設申請手続 ・地域貢献事業における学生ボランティア の活動推進	・各領域にて検討し、実習施設の調整ができた ・看護系センター設置検討WGでの検討によって、教員学生の看護実践、地域貢献の機会の可視化ができた ・YUC看護キャリア開発支援センターの設置に向けて、看護学科と附属2病院看護部が連携して検討を進められた・YCU看護アルムナイ・フークPJを立ち上げ、看護系した・女立ち上げ、看護系したの基盤づくりに着手したの基盤ではいました。を立ちましたがあるというででがあるというでがあるというでがある。まというの地域活動に対し医学部長賞が受賞された	・次年度から新カリキュラムの実習が開始されることからスケジュールや進め方の検証を行う再掲 【特色を出す取組】 ・新カリキュラムの進行に向けて、横浜市内の保健医療福祉機関と連携して、看護教育の維持に向けて検討する・キャリア形成実習、看護の統合と実践の検討を行う・看護実践の場で教員が関わる地域貢献の機会に希望する学生が参画できる
1	・グローバル学習ロードマップの内容の充実化 ・キャリア形成看護学実習・アドバンスIIの 内容の検討	割合を高める必要がある ・入学時TOEFL500点取得学生に対する学習の積み上げが不明確である ・学生が選択できるグローバル関連科目の	連付けと明確化の実施 ・新設科目APEの履修割合10%を目指 す ・グローバル学習ロードマップの改訂 版を作成し、学生への提示を行う ・キャリア形成看護学実習・アドバン ス川の具体的な内容案が作成・提示でき る	4月~ 5月~ 1月~	析(教学IR)を行う ・教務委員会で状況共有と対策の検討を行う ・既存の国際に関する科目・新科目国際看護学演習 II 等のグローバル学習に関するキャリアを育成(支援)する	・グローバル学習ロードマップを用いた授業、オリエンテーションでのグローバル学習の動機付け ・グローバル学習ロードマップの改訂 ・担任教員によるPE単位未取得者への働きかけ ・国際関連科目の授業実施 ・国際関連科目・海外フィールドワークに関するTeamsでの情報提供を拡充した	参加し、国際看護の学びの機会を得た ・グローバル学習ロードマップ改訂版がで きた ・国際関連科目・海外フィールドワークに 関するTeamsでの情報提供の更新頻度が増 えた	・改訂したグローバル学習ロードマップに 沿って学生に対してグローバル学習の動機 づけを継続して行う ・国際関連科目・海外フィールドワークを 継続するとともに、Teamsでの情報提供を 活性化し学生の動機づけと参画機会増を目 指す 再掲 【グローバル教育】 ・国際看護に関する学習意欲の促進をする ・グローバル学習ロードマップの内容の充 実化を行う ・キャリア形成看護学実習・アドバンスII の内容の検討をする

			Plan		Do	Check	Action	
項 目	to	2 課題	3 到達目標	時期	4 スケジュール 内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
D共通課題	【リカレント教育】 ・「学部生とともに学ぶ」をコンセプトとした特色ある実習指導者講習会の開講による、教育実践力の高い実習指導者の育成	・安定的な受講者確保のために、他大学・	合同実習)にて、大学における看護基 礎教育の本質を学び、高い教育実践力 を修得した実習指導者40名が輩出され	4月~6月 8月~11月 11月~ 2月	・実習指導者講習会の受講者の募集・選考 ・実習指導者講習会の開講 ・今年度の評価と次年度に向けた準備 ・フォローアップワークショップの準備 ・修了者(一般含む)対象のフォローアップワークショップの開催・評価		実習)と実習指導者講習会の授業・実習を合同開講し、相互に学び合える機会とした・修了時アンケート調査にて受講者から高い満足度を得た・2月にフォローアップワークショップを開催し26名が参加した	行う 再掲 【リカレント教育】 ・「学部生とともに学ぶ」をコンセプトと した特色ある実習指導者講習会の開講によ る、教育実践力の高い実習指導者の育成を
	【認証評価のその他の継続事項】 ・学生の能動性・主体性を尊重した学生支援を実践する組織づくり ・『キャリア0.』を基盤とした「学生と教職員の協同」と「教職員のFD・SD」としての学生支援活動の推進	・学生支援委員会を、教職員が学生ととも に自己成長するための有意義なFD・SDの 機会と認識し、活動を活性化させる必要が	生支援の活動が、学生と教職員の協同により実践される・『キャリアO.』に関する検討ならびに学生支援への関与が、教職員のFD・SD活動として定着し、学生理解と教育実践能力の向上に繋がる	4月~ 5月~ 2月~	・学生支援委員会の活動方針の共有と 合意 ・年間を通した『キャリア0.』検討等 によるFD・SD活動の開始 ・『キャリア0.』に関する情報共有と 活用推進に向けた調査の検討・実施・ 評価 ・学生の能動性・主体性を尊重した学 生支援の実践 ・学生支援に関するイベントの企画・ 実施・評価 ・学生支援委員会の活動実績による、 学生の能動性・主体性、教職員の学生 理解・教育実践力の向上の評価	・『キャリア0.』を題材とした教職員の FD・SDの機会(交流の場)の確保	のまとめ・フィードバック、公開等の検討 プロセスを通して活動が活性化された	再掲 【認証評価のその他の継続事項】 ・学生の能動性・主体性を尊重した学生支
	【認証評価のその他の継続事項】 看護の統合と実践の講義にて卒業論文の審査 (評価)基準について示す	・具体的な卒業論文指導や評価は各ゼミに 任されている	・学生がどういう基準で各教員が卒業 論文を指導し、評価しているのか理解 できる	4月~	・卒業論文審査(評価)基準の検討を 行う ・看護の統合と実践の講義において上 記基準について教授する ・各卒研ゼミにて上記を踏まえ具体的 に論文について具体的に指導する	・卒業論文、卒業研究の基準の検討 ・講義を通じて基準を学生に教授 ・卒業研究の指導	・卒業論文、卒業研究の基準を学生に提示 できるようになった ・次年度履修ガイド、教育要項にも基準を 明記した	・当該取組は完了した ・今後は卒業論文の基準に準じた卒業研究 指導の評価を検討する
	【研究倫理教育】 教養ゼミや看護の統合と実践の講義にて研究 倫理教育を実施 【医療倫理教育】 医療職、看護職としての倫理教育を実施	・折に触れてレポートの書き方等指導しているが、学生が研究不正の具体的定義や防止法を知っているか疑問がある・医療現場での臨地実習が増加する	究不正を行わずに研究できる・学生が高い倫理観を携えて臨地実習に臨むことができる	4月~	・倫理的配慮のための研究計画立案に関する講義内容を検討する ・教養ゼミや上記講義において研究不正の定義を講義し、具体的に研究不正を行わないことが理解できるように教授する ・看護の統合と実践にて、個人情報 (医療情報含)の取扱について教授する ・各卒研ゼミにて具体的に研究不正を行わず、論文を書くことについて具体的に指導する ・1-4年生の実習共通オリエンテーションの実施 ・情報管理オリエンテーションの実施	'	・学生が研究倫理を理解し、研究不正防止ができた ・学生の倫理観が高まり臨地実習の効果が 得られた	・引き続き取り組みを継続する 再掲 【研究倫理教育】 教養ゼミや看護の統合と実践の講義にて研 究倫理教育を実施する 【医療倫理教育】 医療職、看護職としての倫理教育を実施す る

			Plan			Do	Check	Action
項 枝	1 取組	2 課題	3 到達目標		4 スケジュール	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
目番	1 4X小丘	2 旅燈	3 判廷日悰	時期	内容	3 以音に同りた美体的収値	0 成本	「八十反の取組に同りて
6	・本年度の指定校制学校推薦型選抜の指定校 と各募集人数の内訳を検討する ・公募制学校推薦型選抜による入学者の評価 を行う(成績・進級状況等) ・アドミッション課と連携し広報活動を強化 する(①夢ナビライブでの教員講義の実施、 ②外部相談会に教員や学生が同行、③エクス テンション講座:小・中・高対象オープンク ラス「大学で看護を学ぼう!」の実施、④本 学看護の魅力を伝えるHPの検討と変更、⑤ オープンキャンパスの一部もしくはプレオー プンキャンパスを対面で実施することを検討 する)	受験者の増加に比較し、一般選抜試験の受験者数が低下している ・長期的目標(次年度以降の取り組み)として一般選抜B方式の導入を検討し始める(教科・科目数の減) ・長期的目標(次年度以降の取り組み)として指定校制学校推薦型選抜の条件について再検討し始める(英語のスコア等)	・受験者数が昨年度より増加する	4月~ 5-6月 7月、10月 8月 10月~ 11月 2-3月	・本年度の指定校制学校推薦型選抜の 指定校と各募集人数の内訳を再検討する ・将来的な入試方法について検討可開始 ・広報活動の強化に関する企動の検討・プレオープの対象で学ばう」の実施 ・小、大学で看護で学ばう」の実施・プレオーの実施・プレオーの実施・カープンキャンパステンションの実施・カー・高調で学ばう!」の実施・小大学で看護で学ぼう!」の実施・指定校制・公募制学校推薦型入試の実施・選抜方法の違いによる入学者の評価・選抜方法の違いによる入学者の評価の実施	抜方法の見直しを検討した ・入試広報イベント実施 ・看護学科ミニキャンパスツアー実施 ・看護学科公開授業+キャンパスツアーの 開催 ・夢ナビライブへの参加	・入試選抜について2025年度入試から一般選抜前期日程にB方式導入を決定した・アドミッション課主体の入試広報イベントの他に看護学科独自で6/21公開授業(20名限定)、8/17のオープンキャンパスには342名が参加、8/29は対面でのキャンパスツアーは202名の参加、夢ナビライフには300名の高校生が本学看護学科の講義に参加した。多くの機会を作り看護学科をPRできた・オープンクラス(3回開催:23名)、子どもアドベンチャーカレッジ(1回開催:28組51名)の参加者から高い評価を得た・指定校制学校推薦型選抜 公募制学校推薦型選抜 一般入試については、共に、令和4年度入試と比較して受験者が増加した(指定校:42→45名、公募制:40→45名、一般入試92名→149名)	・本年度の指定校制学校推薦型選抜の指定 校と各募集人数の内訳を検討する ・公募制学校推薦型選抜による入学者の評 価を行う(成績・進級状況等) ・アドミッション課と連携し、また様々な 関連イベントや媒体を開拓して広報活動を 強化する ・小中高生向けイベントを継続して積極的

令和5年度自己点検シート【Plan Do Check Action】<都市社会文化研究科>

			Plan			Do	Check	Action
項	技 1 取組 番 1 取組	2 課題	3 到達目標	時期	4 スケジュール 内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
	【教育の質向上】 ・博士論文・修士論文の質を担保し、 院生が学会発表や投稿論文を積極的に 行うための指導体制を複数教員で整備 し、倫理教育を徹底する。 ・複数の研究科教員や院生たちが学際 的な学問環境のなか切磋琢磨する機会 を授業や研究会として作る。	・主・副以外の教員が院生の研究発表 に参加する機会を作り、指導上の問題	士論文執筆予定者の参加は100%を目指す。 ・修士論文に学際的視点を促進するために「総合研究科目」の内容をディプロマポリシーに基づいて再検討する。 ・修論中間発表会、修論発表会に主・	4月~ 5月~ 10月	・博士後期課程必修科目「多分野交流 演習」にD1のほか博士後期在籍者と博士担当指導教員の出席を促す。 ・総合研究科目の見直しを行う。 5月6月7月9月に集中的に開催し、研究 倫理教育および研究発表、博士論文の 執筆指導を複数教員で行う。 大学院FD研修会で「総合研究科目」 の問題点について議論し、内容を再検 討する。 次年度「総合研究科目」の内容と担当 者を決定する。 修論中間発表会に主・副以外の教員お よび院生の出席を促す。	・今年度新たに博士後期課程必修科目「多分野交流演習」と合体させた都市社会文化研究会を5/26、6/10、7/8、9/9の4回開催した。 ・修士課程必修の「総合研究科目」の問題点を運営委員で整理、残す科目と再構成すべき科目を決定した。(8月)・修論中間発表会に主・副以外の教員参加者を促すため、事前のアナウンスを機会ある毎に行い、時間の融通が利	13時から18時頃まで開催。受講生以外の出席がみられた。 ・今年度開講の「総合研究科目」を検証した結果、英語開講科目は留学生のために残す。来年度(2024年度末)退職予定教員担当の科目を学際的観点か	・博士後期在籍者に対し、博論執筆の情報共有のための環境作りを行う。 ・4科目開講の「総合研究科目」のうち、1科目をディプロマポリシーに即した学際的なオムニバス講義として再構成し、2025年度開講を目指す。 ・修論中間発表会の運営面の問題点を整理し、改善する。
A 教育	2 ・研究科の多彩な研究分野の客員教授と連携したプログラム・研究会運営を行い産学官共同研究や学際的研究のための教育を推進する。・実践的で学際的なアプローチを習得するため、事例を学ぶフィールドワークや実習を取り入れる。	グ、運営への参画を促す。 ・プログラム・研究会運営に偏りや過 重負担がないか見直す。 ・プログラムの実践的教育のための	・客員教授の知識経験を活かすプログラムや研究会を企画する。 ・現在展開中のプログラム・研究会運営担当者へのヒアリングと改善点を洗い出す。 ・持続可能な地域社会プログラムにフィールドワーク・実習先を取り入れる。	4月~ 8月 9月~	方について議論する。	講座、研究会(ジェンダー・PPP/PFI)、教室セミナー、シンポジウムを企画・開催した。 ・現在展開中のプログラム・研究会運営担当者へのヒアリングと改善点を洗い出した。(8月) ・持続可能な地域社会プログラムにフィールドワーク・実習先を取り入れ	ど)との連携を活かした講座・授業・セミナーを開催。受講生からは、多数の分析手法を学べ、授業内容に満足との評価を得たほか、特に、社会人から高評価を得た。 ・PPP/PFI研究会が一般財団法人 民間都市開発推進機構から助成金を獲得した。 ・プログラムのフィールドワークや実	・研究会やプログラムの運営体制の見直し。
	3 D2で記述	D2で記述	D2で記述		D2で記述	D2で記述	D2で記述	D2で記述
	【研究力の向上】※研究科のみ記入 ・研究活動の学際的な交流や共同研究 の促進を行う。 ・院生・教員・博士修了生等が参加する都市社会文化研究会を発足させる。	(都市工学と人文科学と社会科学) に 対する学術的な相互理解を深める。	・「都市社会文化研究会」を立ち上げ 運営体制を確立する。 ・年に4回ほど研究会を開催し、研究 交流の機会を作る。	5月 6月 7月 8月	博士院生および博士取得修了生、博士 指導教員を中心にした研究会への参加 を呼びかける。 研究会の開催 研究会の開催 研究会の開催 FDで研究会について検討 研究会の開催	市社会文化研究会を5/26、6/10、7/8、9/9の4回開催。 ・博士課程在籍者に対し、元院生や教員らによる博論執筆や提出までの体験	を発表し、目的意識を高めた。 ・社会人は仕事と博論執筆との両立に ついて経験者から直接アドバイスを受 けた。	・研究科内で博論執筆の情報提供・共 有のための環境作りが必要。 (A-1と同様)

令和5年度自己点検シート【Plan Do Check Action】<都市社会文化研究科>

				Plan			Do	Check	Action
	i 枝 番	1 取組	2 課題	3 到達目標	時期	4 スケジュール 内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
E	2	・論文提出の際に「研究倫理のチェッ	・研究遂行者であり、教育的立場にも ある研究科教員による研究倫理指導が 正しく行われているか再確認する必要 がある。	・夏期FD研修会で実施する。 ・注意喚起を常に行う。	4月~ 8月 10月~ 1月	修論発表会	・教授会の場や中間発表会前に適宜注 意喚起を行った。(10月) ・大学院紀要『国際・文化研究紀要』 投稿前に研究倫理をチェックする方法 を検討し、シートを作成。(6月)	・院生が修論を大学院紀要に論文投稿 する際、研究倫理チェック項目を含む 投稿前チェックシートを論文投稿時に 提出することを義務づけた。	・修論提出時に研究倫理に関する確認方法の検討。
研 字	3	・海外の研究機関と連携した共同研究 による研究成果の発信。 ・外国人共同研究員との積極的な共同 研究の推進。	・海外の研究機関との共同研究の体制整備が必要。	・すでに行われている海外との共同研究や研究会を母体とする海外機関との 共同研究について検討する。	4月~	研究科内の運営委員(教務委員など)が主となり体制を検討し、研究科内の 教員の協力を得る。海外との共同研究 の可能性と外部資金について検討する	・現在、研究科教員が個々に行ってい る海外研究機関との共同研究の実態と 外部資金獲得状況、研究成果発信につ	・教員の個人研究として、海外の研究 機関と連携した外部資金の獲得、特に 科研費(基盤A・B・C)を用いた研究 や国際共同加速基金(海外連携)への 応募、JSPS外国人招聘研究との共同研 究プロジェクトが進行中。 ・共同研究の成果は、海外でのシンポ ジウム・ワークショップの開催、研 究・論文発表、書籍刊行など、多様な 成果発信がみられる。	ネットワークや、共同研究の成果を明
	4	B1で記述	B1で記述	B1で記述		B1で記述	B1で記述	B1で記述	B1で記述
大きせし	‡ 1	継続的課題として、5~6カ年一貫教育の研究指導体制を構築する。	・都市・社会・文化の分野横断型融合研究の専門性について、研究科の特色	・早期履修者、内部推薦による院生の確保。修士課程院生の3分の1程度を目	4月~ 5月 8月	対員の協力を得る。 学内進学者について教員に打診 FDで5~6カ年教育について議論	説明。(5月~7月) ・学部3年生向けに研究科主催の早期 履修制度説明会を実施。(12月) ・修十1年で修了する早期履修者の履	・R6年度学内推薦による博士前期課程 進学者8名(定員20名のうち)、R5年 度早期履修者は4名(R6年度は3名の申 請があった)。 ・早期履修者の履修モデル(都市系・ 教養系)を作成し、大学院オリエン テーションで配付する予定。	・学部生の早期履修制度の応募条件について再確認する。 ・学部と修士合わせて5~6カ年教育の内容について検討する。
			ない。 ・英語による学位取得を希望する受験 希望者が情報を得られる体制を整える		4月~ 4月~		・夏期FD「大学院における教育体制:英語で課程を修了する院生受け入れ上の問題点を共有し、今後の解決策について考える」を開催。(8月)・グローバル推進課 学務課教務担当	断する認識を改めて共有。 ・重要なお知らせメールは件名冒頭に ★を付す、通訳ボランティアの学生紹介、『履修案内』で重要な箇所は担当 受け入れ教員が英訳し、該当院生に配	・主の指導教員と副指導教員との密な教育連携や教員間の情報交換がよりスムーズとなる教育研究環境を目指す必要がある。 ・英語のみならず、日本語で修了する留学生の論文執筆の教育支援についても問題点を洗い出す必要がある。

令和5年度自己点検シート【Plan Do Check Action】<都市社会文化研究科>

			Plan			Do	Check	Action
項 枝	1 取組	2 課題	3 到達目標		4 スケジュール	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
目番			·	時期	内容	7		
通 課 題 2	の可能性と、教育内容について検討を 行う。	きる内容を検討するとともに、広い意 味でのリカレント教育への接続・誘導	を活用し、リカレント教育への接続方		リカレント教育につながるアドバンストエクステンション講座を企画。 運営委員を中心にアドバンストエクステンション講座の質的向上と、受講生のターゲットと目的を明確にした教育提供について話し合う。	ント教育との接続方策について検討し	・現在展開中のプログラム「持続可能な地域社会」がリカレント教育として有効なことから、人文系でも同様のプログラムを作ることができないか議論を始めた。	・研究科内の専門性にとどまらず、他 研究科の専門と相互連携するようなプログラムやリカレント講座を検討する。
3	【研究科の定員管理と大学院進学率の向上】※研究科のみ記入 ・適正な定員管理のために、入試試験 方法を見直す。	・筆記試験では、指導予定教員の出題による専門性の高い出題を実施してきた。 ・学際的研究科で研究する土台となる 学術的研究の基礎スキルを有しているかどうかを判断する必要性がある。	・指導教員による専門性の高い問題の外に、受験生全員が解く共通問題を1題追加する。 ・専門性プラス総合的な学術的研究の基礎力を評価する。	, ,	入試委員を中心に新たに設定する設問 について検討する。作問者(前期試験 と後期試験用)を決定し、依頼する。	・入試委員を中心に新たに設定する設問(共通問題)について検討し、作問者(前期試験と後期試験用)を決定し、依頼した。(4月)	・共通問題のため専門に関わらず回答できる設問を作問者が作成した。 ・暗記ではなく、思考力を問う上で有効であった。	・引き続き受験生の回答傾向について注視していく。

令和5年度自己点検シート【Plan Do Check Action】<国際マネジメント研究科>

			Plan		Do	Check	Action	
項 枝目 番	1 取組	2 課題	3 到達目標	時期	4 スケジュール 内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
1 A	【教育の質向上】 ソーシャル・イノベーション研究プログラム(SIMBA)の教育体制の検討	 ・SIMBA担当教員が2名⇒4名へと拡大したことにより、教員間の連携を図る。 ・研究指導に関する情報共有、ブラッシュアップを図る。 ・SIMBAの進捗報告、成果報告の仕組み、場を構築する。 	・SIMBAの報告会の場を設定する。 ・講義間の接続、連携を強化する。	半期に1回 7月、2月 随時	SIMBA教員の情報共有会の設定	・SIMBA教員による共同指導体制、定期的な意見交換 ・医療経営・政策研究会の開催 ・メーリングリストの作成	・SIMBA学生の研究内容等について、 主査・副査が連携して指導する体制が 構築できた。 ・医療経営・政策研究会で、SIMBA教 員の紹介や宣伝を行った。 ・メーリングリストで発信できるよう になった。	などをSIMBA学生や修了生とともに進
教育 2		・国際マネジメント研究科は多様な学生(学内生、学外生、留学生、社会人等)が学ぶ場であり、コロナ禍後につき登校する学生の増加が見込まれており、キャンパス内の院生の学習・研究環境、特に自習室の運用について、ルールの確認等が必要	・多様な学生が協働しながら学習と研究の場が確保できている	4~9月通年	院生協議会と自習室の運用について打ち合わせ →都度、進捗状況を入試教務委員会、教授会 に情報共有 課題発生時には院生協議会と協働して都度対 応	・院生協議会と都度連携をとり、学生 教育費の円滑な執行等を支援した。	・多様な学生が協働しながら学習と研究の場が確保された。	・院生協議会を通じた学生支援を継続する。
B 研 1 究	らかにする	・大学院生への教育を研究科全体の研究力向上に繋げる検討が必要 ・教員の研究時間の確保のための検討が必要	・教員の研究時間確保のための具体的な取り組み(例えば教育のDX化)の検討がスタートしている	通年	研究力向上のための提案、取り組みについて、入試教務委員会、教授会等の場で情報共有を行う	・入試教務委員会で、教員の研究時間 に関わる大学院業務(入試業務、入試 説明会等)について、都度議論を行っ た。	・問題提起と情報共有を行った	・情報共有を踏まえ、大学院業務の整理を行っていきたい。
C 特色出	【特色を出す取組】 ・博士前期課程における教育プログラムの新設を検討する。具体的には、経済学division において、経済理論を踏まえたデータ思考力を醸成する教育プログラム「YCU EconMastersプログラム」の新設を検討する	の体系的な提供と教育資源の効率化	 経済学の新プログラムの検討のため、 若手教員によるワーキングが立ち上げられている ・プログラムの修了要件等が策定されている ・カリキュラムの検討が進行している 	4~9月10~3月	検討のためのワーキングを立ち上げ →都度、進捗状況を入試教務委員会、教授会に情報共有 24年度カリキュラムへの反映とプログラム 修了要件の作業を進める	新設のためのカリキュラム(修了要	・R6年度より、「YCU EconMasters プログラム」の新設を決定した。	・新入生に同プログラムの周知を行う。 ・プログラムの科目の充実を検討す る。
2			・職業専門団体であるIMA(Institute of Management Accountants)とMOUを締 結し、関連科目を開講する。	前期 適宜 後期	IMAとMOU締結 IMA関係者と情報交換 関連科目を開講	・「IMA学生支援プログラム」の新設のための応募要件を検討した。	・R6年度より、「IMA学生支援プログラム」の応募要件を決定した。 ・教室セミナーを通じてUSCMAや IMAの啓蒙をおこなった。	・新学期オリエンテーションで同プログラムの周知をおこないプログラムへの参加を促す。・提携校との情報共有を進めたい。
1		出願を実現するため、博士前期課程で は、日本語能力試験のあり方について	・入試において留学生の属性を多様化させるという観点から、現行の出願要件について現状を踏まえた検討が行われている	4~5月 6~9月 10~3月	25年度入試の出願要件を確認する			・R7年度入試の外国籍出願者数、入試結果を注視し、変更点の影響を確認する
	の定めるリカレント教育に該当するよ		・学位プログラム(SIMBA等)が本学の 定めるリカレント教育として、大学ホー ムページ等において周知が開始されてい る	4~9月10~3月	本学の定めるリカレント教育の定義を、入試 教務委員会と事務局との間で確認を行う SIMBAプログラムがリカレント教育とし て、大学ホームページへの掲載が完了している	の定義の確認を行った。 ・広報と協力しSIMBAプログラムの		・引き続き、発信するコンテンツを充実させる

令和5年度自己点検シート【Plan Do Check Action】<国際マネジメント研究科>

				Plan			Do	Check	Action
項	枝	1 取組	2 課題	3 到達目標		4 スケジュール	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
目	番	1 4X和	∠ 床皮	3 判廷日悰	時期	内容	3 以番に同りた具体的収租	0 放未	7 久年度の取組に向りて
			・SIMBAの広報活動を努めるととも	・SIMBA1-3期生および教員間のメーリ	4月~	メーリングリストの作成、運営	・YCU病院経営プログラム開放科目等	・社会人特別選抜の入試説明会には17	・これまでの宣伝チャネルは維持しつ
			に、入試説明会への参加人数を増や	ングリストを作成する。	4-6月	YCU病院経営プログラム開放科目等で	でSIMBAの宣伝を実施。	名の参加申込があり、最終的に4名の	つ、横浜市への周知や民間企業へのア
			す。	・YCU病院経営プログラム8期生および過	4-6月	SIMBAの宣伝を実施。	・YCU病院経営プログラム過去参加者	入学者を確保できた	プローチなど拡大する
	2		・SIBMA学生は1-3期生で計10名とな	去参加者に対して入試説明会の参加を呼	5-6月	YCU病院経営プログラム過去参加者への	へのSIMBA入試説明会の告知	・説明会参加者や入学者の職種や勤務	
	-		り、縦のつながりの創出が必要。	び掛ける。	5-6月	SIMBA入試説明会の告知		先がこれまでよりも多様化した	
D			・SIMBAの育成像を共有する。	・横浜市データ活用研修においてSIMBA	4-6月	国マネHPのリニューアル			
共				を紹介し、入試説明会の参加を呼び掛け					
通				る。					
課				・作成したSIMBAのチラシをYCU病院経		提送士三 ね浜田研修におけてCIMDAの亨			
題				営プログラム履修生に案内する。	7-8月	横浜市データ活用研修におけるSIMBAの宣			
				・国マネHPを整備し、SIMBAの情報を充		ΔI			
				実させる。					
				・SIMBAの育成像を明文化する。					
		【研究科の定員管理と大学院進学率の				院 4 の II の			
		向上】※研究科のみ記入			盗左	院生の研究成果を教授会で報告するととも			
		定員超過又は定員未充足に対する取組	・国際マネジメント研究科では、2009	・2024年度入試説明会で、博士後期課程	通年	に、大学ホームページへの掲載等の広報を都	・院生の研究成果を教授会で報告し、	・2024年度入試説明会で、博士後期課	・博士前期課程、後期課程共に、内部
		・博士後期課程在学生の研究成果の発	年度の開設以降、2013年度と2021年度	を志望する参加者を1名以上確保する		度行っていくしていく	大学ホームページへの掲載等の広報を	程を志望する参加者を1名以上確保し	進学者と社会人(リカレント教育)の
		信を、大学ホームページ等で継続す	を除いて、博士後期課程への進学者を	・国マネ在学生の活躍(学会報告等)を		院生のインターンシップの状況を入試教務委	都度行った。	た。	増加に向けた取組を行っていく。
			毎年を確保し、2022年度については、	大学ホームページに1件以上掲載する	通年	員会等で情報共有を行うと共に、院生のイン	・院生のインターンシップ先を探索し	・国マネ在学生の活躍(学会報告等)	
	3	・横浜市立大学データ思考イノベー	3名が入学した。			ターンシップ先の探索を続ける	た。	を大学ホームページに1件以上掲載し	
		ティブ人材フェローシップ で必要とさ					・大学ホームページに掲載の国際マネ		
		れる、インターンシップ先の探索を継				大学ホームページに掲載の国際マネジメント		・博士後期課程入試では4名の出願者	
		続する			4~9月	研究科の情報を確認し、追加・修正を検討す	加・修正した。	があった。	
						5 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1			
					10~3月	大学ホームページの追加・修正について依頼			
						を行う			

令和5年度自己点検シート【Plan Do Check Action】 <生命ナノシステム科学研究科>

_				Plan			Do	Check	Action
	頁 枝目 番	1 取組	2 課題	3 到達目標	時期	4 スケジュール 内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
	A 女 1	【教育の質向上】 1. 理学部と大学院との連携協議を継続し、将来構想に基づくカリキュラムと部門の見直しを図り、研究指導力を強化する。 2. 理学部と連携して、学部生の大学院科目の早期履修を推奨し、大学院進学時の学生の基礎学力の向上を図る。	分野に基づいた部門制が構築できていない。 2. 早期履修受講者数が毎年横ばいであ	1. <u>理学部との連携強化</u> による6年一貫 教育が明確になり、 <u>大学院の部門制再</u> <u>構築に基づく人事計画を実施</u> し、研究 指導力が強化されている。 2. <u>早期履修受講者が増えて学力が向上</u> している(目標50名程度)。	通年	1. グランドデザイン会議の開催 2. 早期履修制度説明会の開催	た。 3. <u>将来計画に基づいた採用人事</u> を行	題、将来計画などを <u>共有</u> することができた。 2. <u>例年通りの早期履修者数</u> を確保でき	的な情報共有 2. 学部教育との連携強化 3. 早期履修者数の増加に向けた取り組
石	3 开 1 宅	通して教員間の共同研究を推進し、将	ていく必要がある。 2. 研究指導・研究倫理に関する問題点	1. 研究科の特徴的分野について学内外から認知されている。 2. 学内外との共同研究が活発化してい	通年 未定		た。 2. 博士前期、博士後期ともに、 <u>必修科</u>	の <u>議論の場を提供</u> することができた。 2. 研究不正も含めた <u>研究倫理教育の重</u>	1. 研究紹介セミナーの継続的な実施と 教員交流の場の提供 2. 研究倫理およびハラスメントの防止 に向けた教育の継続的な実施
牛	5 持 5 1	フ制度の仏報沽動と、字位審査基準の 確認および見直しなどの改善を並行し て進める。 2. 博士後期進学の重要性について、 キャリア支援センターなどの協力を得		1. <u>優秀な社会人大学院生の獲得</u> に向けた早期修了プログラムの入学者が増え (目標1名以上)、産学連携や共同研	4月・1月 通年	よび早期修了制度の案内 学位審査基準の見直し	1. <u>入試説明会</u> (4月と9月の2回)、および <u>推薦入試制度説明会</u> を実施し、フェローシップ事業を含む大学院進学へのアピールを行った。 2. <u>学位審査基準</u> について、運営会議・代議員会にて意見交換を行った。	1. <u>博士前期・博士後期課程の志願者数</u> は昨年とほぼ変わらなかった。	1. 博士前期・博士後期課程の志願者 数、入学者数増加のため、特に内部進 学者数増加に向けた取り組み。 2. 社会人ドクターに必要な学位要件や 学位審査基準の見直しの検討
	1	【グローバル教育】 1. 個々の教員の共同研究先の大学や研究所を介して、オンラインおよび対面での国際化教育を実施し、協定校の拡充を推進する。 2. 専門分野に合った英語科目(特講)を拡充する。	1. 専門分野に合った英語講義科目や協 定校の拡充が必要である。	1. 専門英語講義科目も増え、双方向による <u>国際化教育</u> が行われている。 2. 海外連携大学が増加している。			および履修者以外にも開放し、国際化 科目の拡充を図った。 2. <u>国際リトリート</u> として海外FWを対	2. 海外FWによるシンポジウムへの教	
[共 说 言) ± 2		1. リカレント講座開催のための時間や 予算の確保。	1. <u>学校教員向けのリカレント講座</u> が開 講されている。	8月	1. リカレント講座の開講	1. 中学・高校教員向けのリカレント講座を企画した。		1. ニーズにあったリカレント講座を検 討する。

令和5年度自己点検シート【Plan Do Check Action】 <生命ナノシステム科学研究科>

				Plan			Do	Check	Action
項	枝	1 取組	2 課題	3 到達目標		4 スケジュール	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
目	番	1 40/10	2 成化	3 对在口怀	時期	内容	3 以音化时仍 / (0 <i>p</i> , x	7 外中皮の状態に同りて
題		【研究科の定員管理と大学院進学率の			4月・9月	1. 入試説明会の実施(年2回)	1. オリエンテーションや入試説明会で		
		向上】※研究科のみ記入			4月・1月	 2. 推薦入試説明会の実施	<u>フェローシップ制度を紹介</u> した。		
		1. (C-1-2より) 博士後期進学の重要					2. 必修科目初回に <u>博士後期課程や留学</u>		
		性について、キャリア支援センターな	1 (0 1 2 1 1) 土岗院生活为土岗院		世十	3. HPなどによるフェローシップ、早	<u>等を紹介</u> した。	1. 博士前期・博士後期課程の <u>志願者数</u>	1. 博士前期・博士後期課程の志願者
	2	どの協力を得て説明の機会を作る。	1. (C-1-2より)大学院生活や大学院 修了後のキャリアなどについて実際の	1. <u>社会人を含め学生定員の充足率</u> が満		期修了制度の案内	3. 大学院生の研究成果や受賞などの広	<u>は昨年とほぼ変わらなかった</u> 。	数、入学者数増加のため、特に内部進
	3	2. 必修科目などを利用して、学部生、 1		たされている。	通年	4. 学部生へ向けた大学院生による大学	<u>報活動</u> を進めるとともに、大学院入試	2. 次年度に向けて大学院入試に関する	学者数増加に向けた取り組み(3年生
		および博士前期課程学生へ大学院進学	情報が少ない。			院生活・キャリア紹介等	に関するHPの改訂案を進めた。	HP改善案を作成した。	後期に入試説明会を開催予定)。
		の紹介を行う。			4月		4. 大学院生による大学院生活・キャリ		
						5. 必修講義やオリエンテーションにお	ア紹介等を理学部基礎ゼミで行なっ		
						ける博士後期課程進学の紹介	た。		

			Plan			Do	Check	Action
項┃桁	I BV 治口	2 課題	3 到達目標	 時期	4 スケジュール 内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
A 教育	【教育の質向上】 ・博士前期課程における新カリキュラム適用者の修了年度となる。 ・医学研究科「バイオインフォマティクス特講」の他研究科開講科目として	である。 ・他研究科科目の履修について、関係 部署との情報共有を図り、内容変更が	・新カリキュラム適用学生の満足度 ・オリエンテーションや教員による履修指導を参考に、各学生がカリキュラムに沿って適切に履修している。 ・「バイオインフォマティクス特講」の目標単位修得者数:3名程度	4月 4月-3月 5月 11月 10月-12月 3月	オリエンテーション等で履修指導実施 博士前期課程の新カリキュラムに基づ く教育の実施 後期授業評価アンケートのフィード バック 前期授業評価アンケートのフィード バック 「バイオインフォマティクス特講」の 開講 後期科目の成績確定	4月:オリエンテーションで履修指導を実施。 5月:博士前期課程修了予定者の学生アンケート結果を報告。 8月:前期科目授業評価アンケートを実施。 10月-12月:「バイオインフォマティクス特講」を博士前期課程選択科目として開講。 11月:前期科目授業評価アンケート集計結果を、科目担当教員にフィードバック。	・学生アンケート結果をもとに、修士 論文中間発表会の適切な実施時期を議 論、確認できた。 ・「バイオインフォマティクス特講」 は3名が履修した。	・博士前期課程の新カリキュラム適用 学生が修了するため、アンケート結果 を分析し、さらなる改善につなげる。 ・授業形式については、対面とオンラ インそれぞれの利点を活かし、科目内 容もふまえながら併用する。
B 研究	【研究力の向上】 ・産学連携、国際的な機関と連携した 共同研究の強化 ・Reserchmap等を活用した研究成果 の積極的な広報・発信 ・若手研究者への支援 ・大学院生の研究力強化 ・研究倫理に関するプログラム実施、 実験ノート記入に関する指導指針周 知、アンケート等による効果測定	・論文投稿料の高騰に伴う支援・研究倫理に対する学生の意識向上	かつスピーディな広報・発信 ・研究科内における研究内容の共有と 連携体制の構築状況 ・研究倫理教育の有用性に対するアン ケート回答内容	4月 5月-7月 6月 10月 11月 5月/10月/12月 /2月/3月	・教授会での学内ルール周知、実験 ノートに関する指導依頼 eラーニング(eAPRIN)の受講 理研安全管理講習の実施(オンライン) 科目内で外部講師による研究倫理教育 の実施(前期課程1年) 必修科目内で研究不正・研究倫理を テーマにしたディスカッションの実施	10月:博士前期課程1年次必修科目で外部講師による研究倫理教育を実施。 12月:博士後期課程1年次必修科目で研究不正・研究倫理をテーマにした討論を実施。	適切な研究活動のための知識やルール	・研究倫理や安全管理に関する取組、 及び副指導教員面談を活用した多面的 な支援を行い、公正な研究活動を推進 する。
C特色出し	【特色を出す取組】 ・医理連携協議会を通じた情報共有や課題解決を通じた意見交換と連携体制の構築。 ・セミナー情報の共有および教員の交流機会の構築。 ・医学研究科開講科目「バイオインフォマティクス特講」の修了単位認定。 ・臨床に近い分野の研究を行う教員の医理連携への参画。	・医理連携の継続性ある実施体制		4月-3月 7月/11月 10月-12月	医理連携協議会(年4回程度) 研究科交流セミナー 「バイオインフォマティクス特講」の 開講	※「バイオインフォマティクス」については、A(教育)-1を参照。	た。 ・医理連携セミナーは、両研究科における授業の特別回としても位置付けられ、学生及び他キャンパスを含む教職員合計で7月は155名、11月は89名が	・「バイオインフォマティクス」や医

				Plan			Do	Check	Action
IJ E	技番番	1 取組	2 課題	3 到達目標	時期	4 スケジュール 内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
	1	【グローバル教育】 ・国際共同研究などの取組の促進 ・世界で活躍する研究者をセミナー講 師として招へい	・提携先の開拓、調整	・海外大学、研究所に所属する研究者 とのオンラインセミナーを実施し、積 極的に学生の参加を促す。	7月-3月	海外研究者とのオンラインセミナーを実施	7月-3月:海外の研究機関と、オンラインを含むセミナーや共同研究を実施。 12月:博士後期課程1年次必修科目で外国籍ゲスト講師を招へいし科学英語プレゼンテーションに関する授業を実施。		・引き続き、海外の大学や研究所等と の共同研究を積極的に実施し、研究成 果発信につなげる。
[共 说 言 是	之 注 直	【リカレント教育】 ・企業や研究機関で研究を行う社会人が博士後期課程進学の契機となるよう、総論科目を開放することを検討。 ・研究科学生の研究内容に応じて、DS リカレントプログラムの受講を推奨。	・単独研究科で多くのプログラムを準 備・運営することが困難。	・研究科在学生のDSリカレントプログラム受講者が2名以上。	4月-3月 6月-3月	DSリカレントプログラム受講 リカレントプログラムの検討	4月-1月:DSリカレントプログラムの受講。 7-8月:リカレントプログラムの検討。	・企業や研究機関等の研究者を対象 	・DSリカレントプログラムの受講について周知を図る。・引き続き、リカレントプログラムの開講について検討する。
	3	【研究科の定員管理と大学院進学率の 向上】 ・定員確保のための積極的かつ正確な 情報提供 ・大学院科目早期履修の推奨	・入学辞退者数、及びアクティビティ	・各教員の研究内容が受験生に周知されている。 ・入試説明会で、受験者が必要としている情報が提供されている。 ・大学院科目早期履修の情報とメリットが周知されている。	4月 5月/7月/9月 1月	研究科webサイトの更新 入試説明会の開催 早期履修に関するガイダンス、申請	4月:研究科Webサイトの入試情報を更新。 5月/7月/9月:入試説明会を開催。 11月:鶴見キャンパス見学会を開催。 1月:学部3年次生に対し、大学院科目早期履修制度及び学内推薦入試の説明会を開催。	・博士後期課程は入学定員を充足し、 優秀な学生を確保できた。 ・鶴見キャンパス見学会では、ポス ターセッションや施設・研究室見学も 実施し、大学院進学もふまえた研究内 容への関心を高める機会を提供した。	・「データ思考イノベーティブ人材フェローシップ」とも連携しながら、優秀な学生確保を図る。 ・入試説明会では、受験者が必要とする情報の提供に加え、研究内容の発信も積極的に行う。 ・学部生の進学意欲を高めるよう、制度の周知と研究内容紹介の機会創出に努める。
	E 4	【認証評価結果】 ・定員未充足の取組 ・学生間の交流、大学院生の孤立解消 への取組	・【研究科の定員管理と大学院進学率の向上】と同上 ・研究室外での対面コミュニケーションの機会を設けづらい。	・副指導教員とも研究進捗や学生生活 上の課題が共有できている。	4月-3月 5月/7月/9月 5月/10月/12月 /2月/3月	鶴見キャンパス交流セミナー「よこはまコロキウム」の開催 入試説明会の開催 副指導教員定期面談の実施	4月/7月:「よこはまコロキウム」を開催。 ※「入試説明会」については、D(共通 課題)-3を参照。 ※「副指導教員による定期面談」については、B(研究)-1を参照。 10月:理化学研究所との一般公開で、 学生・事務室合同企画を実施。 2月:鶴見キャンパスの教員、研究者、 学生による懇親会を開催。	・「よこはまコロキウム」では、自由な意見交換の場を設定し、研究者の交流促進を図った。 ・一般公開での企画を通じ、研究室を横断した学生交流の機会を提供できた。 ・副指導教員との面談により、指導教員には相談しにくい課題についても解決策の助言ができた。	・引き続き、学生間及び学生-教員間の 交流を目的とした機会の創出、及び副 指導教員との面談を通じた風通しのよ い研究環境の確保に努める。 ※「入試説明会」については、D(共通 課題)-3を参照。

令和5年度自己点検シート【Plan Do Check Action】 〈データサイエンス研究科〉

				Plan			Do	Check	Action
	枝番	1 取組	2 課題	3 到達目標	時期	4 スケジュール 内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
A 教育		する。 ・HDS専攻では博士後期課程学生に対し適切な指導を行う。	・若手教員の教育経験が浅く、指導資格取得まで時間を要する。 ・新規採用教員の専門分野が未知である。 ・HDS専攻における博士後期課程学生の指導は今年度が初めてである。	・博士前期/後期課程ともに休学を除 く修了年次生全員が学位を取得する。 ・カリキュラム改定案を完成させる。	①通年 ②後期	①学生本位の授業・研究指導に取り組む ②カリキュラムの改定案を作成する	・新任教員および現教員の大学院における指導資格審査を行い、指導体制の充実を図った。 ・Zoomやみなとみらいキャンパスを効果的に活用した指導を行った。		・引き続き、教員定員の充足を目指す。・DS専攻ではカリキュラム改定を検討する。
B 研究	1		・特にDS専攻では、各教員が主・副研 究指導教員として担当している学生数 が少なくない。	・研究指導における副研究指導教員の 関与が強化されている。 ・博士前期/後期課程ともに休学を除 く修了年次生全員が中間報告会あるい は予備審査発表会を行う。		①主・副指導教員が連携し、適切な研究指導プロセスの実行を図る ②中間報告会および予備審査発表会を 実施する	・DS専攻では修士論文提出計画書を提出させ、副研究指導教員にも研究進捗 状況の共有を行った。 ・修士学位論文の中間報告会および博士学位論文の予備審査発表会を行った。	で、適切な進捗管理が図られた。 ・修士学位論文の中間報告会および博	・引き続き、主・副研究指導教員が連携し、適切な研究指導プロセスの実行を図る。 ・修士学位論文の中間報告会および博士学位論文の予備審査発表会を行う。
C 特 色 出	1	【他研究科との連携】 ・一部科目を他研究科に開放し、研究 科間の連携を図る。 ・ヘルスデータサイエンスセミナーを 実施する。 ・サマーデザインワークショップを実 施する。 ・研究科ニュースレターを発行し、教 員の研究成果を発信する。	・両専攻ともに教員の人数が限られており、新任教員も少なくない。	・一部科目を他研究科に解放する。 ・ヘルスデータサイエンスセミナーを	②前期 ③9月 ④後期	③サマーデザインワークショップを実施する④バイオインフォマティクスの授業を実施する⑤研究科ニュースレターを発行する	マネジメント研究科に開放した。 ・修士および博士学位論文発表会を他研究科にも開放した。 ・都市社会文化研究科と共同で戦略的都市づくり研究会を設置し、研究成果をシンポジウムで発信した。 ・サマーデザインワークショップを実施した。 ・バイオインフォマティクスの授業を提供した。 ・原則として毎月、研究科ニュースレ	・国際マネジメント研究科の学生がDS研究科の科目を受講し、研究科間の連携が図られた。 ・他研究科の教員が修士および博士学位論文発表会に参加した。 ・都市社会文化研究科との融合研究が進展した。 ・サマーデザインワークショップには40名が参加し、データサイエンス人材の育成に寄与した。 ・研究科ニュースレターによって、各教員の研究が広く周知された。	・引き続き一部科目を他研究科に開放し、研究科間の連携を図る。 ・他研究科と合同セミナーを実施する。 ・サマーデザインワークショップを実施する。
	2	【産官学連携】 ・横浜市のデータ利活用人材育成支援 業務の委託を受け、上級者向けの講 義・演習を行う。 ・DeNAとの産学連携協定に基づき、 データソンを開催する。 ・神奈川県の医療計画に資するデータ 分析を行う。	・教員の人数が限られており、持続可能な連携の在り方を模索する必要がある。	・横浜市や神奈川県といった自治体との連携を進め、政策へのデータの利活用に貢献する。 ・様々な分野における企業連携を進め、教育・研究の質を向上させる。	①通年		・横浜市の職員向けに「データ利活用 人材育成プログラム」を実施した。 ・DeNA, サイバーエージェント等と の共同研究を実施した。 ・鎌倉市と観光に関する共同研究を実 施した。	寄与することができた。 ・鎌倉市の観光政策の立案に寄与する	・引き続き、横浜市との連携を進め、 横浜市における政策へのデータの利活 用に貢献する。 ・引き続き、様々な分野における産官 学連携による教育・研究の推進を図 る。

令和5年度自己点検シート【Plan Do Check Action】 〈データサイエンス研究科〉

				Plan			Do	Check	Action
項目		1 取組	2 課題	3 到達目標	時期	4 スケジュール 内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
	【グローバル教育 ・国際学会への等 ・留学生を受け <i>刀</i>	生の参加を促す。	・英語による科目を提供していない。	・海外フィールドワークにより学生を 現地へ派遣する。 ・SUDP2023へ学生が参加する。 ・IACSCタイ大会へ学生が参加する。 ・GCI主催のワークショップへ学生が 参加する。 ・留学生を受け入れる。	①通年	①国際学会への学生の参加を促す	・修士学位論文の要旨を英語で提出させた。 ・都市社会文化研究科と共同で海外研究者の英語によるセミナーを実施した。	・学生の英語力の向上が図られた。	・修士学位論文の英語要旨を継続する。 ・国際学会への学生参加を推奨する。
	る。	- プログラムを実施す - ントプログラムの内	・受講生のレベルに差が見られる。 ・大学院科目の数が限られており、多 様なコース展開が難しい。	・DSリカレントプログラムにおいて 2 コースを提供し、社会人に対するリカレント教育を実施する。・来年度のプログラム案を完成させる。		①DSリカレントプログラムを実施する ②来年度のプログラム案を作成する	・大学院科目を組み合わせることで、 履修証明プログラムであるDSリカレントプログラムにおいて二つのコースを 提供した。 ・次年度のDSリカレントプログラムの 内容について検討した。	・延べ6名の受講生がDSリカレントプログラムを修了した。 ・より多くの大学院科目から成るDSリカレントプログラムのコースについて募集を開始できた。	・DSリカレントプログラムを提供することでリカレント教育に寄与するとともに、社会におけるデータ思考の促進に貢献する。
共	【FDの実施】 ・DS学部とも連 る を進める。	携してFDの取り組み	・指導内容の専門性が高く、経験の共 有が必ずしも効果的ではないことがあ る。	・教員のFD参加率を100%とする。	①通年 	①DS学部と連携してFDを実施する	・DS学部と連携して,利益相反マネジメントに関するFDを実施した。	・利益相反マネジメント体制に関して、教員に周知することができた。	・引き続き,DS学部と連携してFDを 実施する。
	向上】※研究科の ・大学院説明会を 確保を図る。 ・入試方法を検討 学を促進する。 ・引き続き、研究	理と大学院進学率の のみ記入 を実施し、志願者数の 対し、優秀な学生の入 で科ニュースレターを での、 での、 での、 での、 での、 での、 での、 での、 での、 での、	・教員の専門分野に偏りが見られる。 ・HDS専攻のアドミッションポリシー ではDS学部からの学生の進学が難し い。	・大学院説明会を実施する。 ・来年度の入試方法案を完成させる。 ・研究科ニュースレターを発行する。		①大学院説明会を実施する ②来年度の入試方法を検討する ③研究科ニュースレターを発行する	・DS専攻、HDS専攻ともに入試説明会を実施した。 ・データサイエンスセミナー・ヘルスデータサイエンスセミナーを実施した。 ・DS学部からHDS専攻への進学のため、DS学部にリメディアル科目を設置した。 ・DS専攻博士前期課程では推薦入試枠の拡大を検討した。 ・DS専攻博士前期課程では9月修了も可能となるよう制度の改定を行った。 ・原則として毎月、研究科ニュースレターを発行し、教員の研究を広く社会に発信した。	・データサイエンスセミナーには92名, ヘルスデータサイエンスセミナーには145名が参加し, DS研究科について広く社会に発信した。 ・DS専攻博士前期課程では推薦入試枠の倍増した。 ・DS学部からの推薦によって9名がDS専攻へ進学することとなった。 ・DS学部から3名がHDS専攻へ進学することとなった。	・大学院説明会を実施し、志願者数の確保を図る。 ・データサイエンスセミナー・ヘルスデータサイエンスセミナーを実施する。 ・DS学部からHDS専攻への推薦入試制度を検討し、優秀な学生の入学を促
	5 するため、ゼミ国	☑化防止】 □学生間の交流を促進 ☑や研究室等の部屋の ☑、DS学部も含めて再	・学生室として利用可能な部屋が限られている。・オンライン授業のため、通学しない学生も少なくない。	・学生室の利用方法の見直しを通して、学生間の交流を促進する。	①通年	①各部屋の利用状況を調査し、適正な 利用に向けた方法を検討する	・大学・高専機能強化支援事業に応募し採択された。	・学生室の拡充に向けて設計を開始することができた。	・学生室の改修を行う。 ・学生間の交流を促進するための学生 室の利用方法について検討する。

				Plan			Do	Check	Action
	枝番	1 取組	2 課題	3 到達目標	時期	4 スケジュール 内容	- 5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
A 教育	1		の有効沽用のための教室间連 携が十分とは言えない	・研究インタレストグループ やメーリングリスト等、 <u>情報</u> 共有ツールを活用し、さらな る具体的な連携を向上させる	①4月 ②通年 ③通年	①研究インタレストグループへの参加案内 ②医学部・医学研究科合同運営会議での教室紹介 ③医科学専攻会議における検討	いて研究インタレストグループの説明・参加案内を行った。(4月11日:修士新入生、4月11日:修士在学生、4月6日:博士新入生、4月7日:博士在学生) ②4月4日専攻会議にて研究インタレストグループの学内への案内実施について報告後、全教室に周知配信を行った。 〇その他:令和4年度に「共用オープン居室」と	①②令和5年度研究インタレストグループ新規登録者数18人(内訳:大学院生8人、教員8人、職員2人) (2024/2/1現在の全登録者301人/内訳:大学院生139人、教員133人、職員他29人)・メーリングリスト等情報共通ツールの提供により各教室の研究領域を超えた情報共有が可能な仕組みとなっている。・大学院講義(大学院医学セミナー、生命倫理セミナー、バイオインフォマティクスなど)の公開講義を告知し、毎回参加者が出ている。・共用オープン居室B548室は修士学生を中心に利用されている。(但し部屋が大きくないため、空席が無い場合もある)	レーショナルリサーチを一層強化するための取り組みを検討する。 ・共用オープン居室B548については、繰り返し周知し異なる教室の大学院生間の交流を促進する。
A 教育	2	【教育の質向上2】 ①E-ラーニングや遠隔講義を 取り入れた講義展開 ②博士課程学位申請必要書類 と評価方法の検討 ③生成系AIに関するFD研修会 の開催	①社会人学生が多数を占めるため、多種多様な学生のニーズにあった講義展開が求められる ②生成系AIの出現による影響を踏まえ、博士課程学位申請必要書類と評価方法について精査が必要 ③教員のAIリテラシーを高め	つつ、 <u>教育の質、研究の質を</u> 低下させかいシステムの構築	①通年 ②通年	を活かした講義の実施 ・講義開講形態を見渡し、学生から受講不都合が出る講義がないか確認する ②・医科学専攻会議及び教授会等	況を踏まえ、(実習や演習等を除き)教員が対応できる範囲では原則オンライン講義にて実施した。特に必修科目は夕方以降、夜間講義を中心に時間を配置した。オンデマンド可能科目は対応を研究科内で依頼した。 ②定員未充足問題を踏まえ、学位審査/評価方法の前段となる「学位論文」の内容について討議を行った。 ③生成系AIと教育との関りについて年度当初から議論を行い、研究科としてFD研修会を実施した。9月12日「第1回 Chat GPT等生成系AIに関する理解を深めるためのFD」を実施した。	・その他、医科学専攻学生の履修登録に関して、これまでForms等を活用した独自申請を行っていたが、学生/事務方双方の作業効率化のため <u>令和6年度から全学のYCU-Portalシステムに切り替える準備を行った。令和6年度から使用開始する。</u> ②令和5年度は博士学位授与にとどまらず、博士課程の定員未充足の状況を踏まえた進学状況に関するデータ分析、医科学専攻内でのアンケート実施などが継続的に実施され、定員充足に向けた活	義形態、時間割配置を実施する。コロナ禍から 通常時に戻っている社会環境も踏まえ、対面実 施が重視される科目や修士課程学生向けの対応 など再考の余地がある。 ・今和6年度以降、YCU-Portalシステムを活用 した履修登録方式に切り替えるため、マニュア ル作成など準備を行う。 ・学位論文のあり方(申請書類/評価方法)につ いては、定員未充足問題を踏まえて、引き続き 検討を行う。 ・生成系AIと大学院教育については、次年度以 隆もFD研修会など継続して情報収集と啓発を行

				Plan			Do	Check	Action
	枝		2 課題	3 到達目標		4 スケジュール	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
目	番	1 4X/吐	2 旅燈	3 判廷口惊	時期	内容	3 以番に同りた具体的収組	0 风未	7 次年及の取組に同りて
B 研究		【研究力の向上】※研究科の み記入 公正な研究活動と研究倫理教 育の持続的な取組		・e-APRINの受講やFD研修会等での啓発を継続し、教室・研究グループ間での十分な意思疎通や課題共有を行い、研究活動に伴うデータを適切に保管・管理する・投稿論文の事前チェックシート提出の促進	①4月 ②前期 ③通年	オリエンテーションでの研究倫理・不正防止に係る説明の実施 ②・e-APRIN(e-learnig)の受講	①4月に開催した修士・博士新入生向けオリエンテーションでは、倫理委員会委員長から研究倫理・不正防止に係る説明を行った。 ②令和5年度履修カリキュラム(生命倫理セミナー)においてAPRIN(e-learnig)の受講必須(前期推奨)としている。 ③令和5年度通期 生命倫理セミナー(必須講義)を開講し、研究を中心とした倫理教育を継続している。	①②③例年開催するオリエンテーション大学院博士課程・修士課程への入学者への説明会や必須科目である倫理セミナー、APRIN (e-learning)を義務化することにより倫理マインドの醸成を図っている。	するカリキュラムへの反映等について継続的な
C特色出し	1	【特色を出す取組1】 教育研究指導体制、カリキュ ラムや入試の継続的な改善	・教育研究指導体制、履修カリキュラムや入試方法は、 DP (ディプロマポリシー)、CP (カリキュラムポリシー)に従って、必要に応じて改善していく必要がある	て、教育研究指導体制、カリキュラムや入試に関して行った変更(外部英語試験の導入)後の <u>評価を行い、教育研</u> 究指導体制について継続的に	12月	・教育評価アンケート実施、評価、評価結果への対応	例年、大学院生を対象に講義、研究指導の満足度、コロナ禍以降においては、遠隔講義、COVID-19 の学習、研究への影響について教育評価アンケートを実施している。令和4年度以降は、後期科目(バイオインフォマティクス特講、英語プレゼンテーション法、ゲノム医学等)の評価反映のため、12月にアンケートを配布し、1月期限で実施している。	攻会議、医学研究科代議員会で報告後、医学群全 教室教員にフィードバックを行っている。	・医科学専攻必須科目である大学院医学セミナーについては、令和6年度も聴講者の希望による講師選出を継続的に実施することとした。・「バイオインフォマティクス実践・特講」について、先端医科学研究センター担当教員、産学連携推進と連携して引き続き開講し、他研究科などにも広く周知(一部単位化)する。
□ C特色出し		【特色を出す取組2】 臨床研修や専門医資格の取得 と大学院での研究を両立させ るための環境整備	・臨床研修や専門医取得と大 学院の両立が可能となる環境 のさらなる整備が必要 ・専門医制度によって博士課 程進学者が減少すると、大学 院での人材育成が後退し、医 学部・医学研究科・附属病院 の教員確保にも影響が出る	大学院と初期研修を兼ねる制度を継続し、研究・学習しやすい環境を整える・令和5年度から始動した臨床研修医基礎研究医プログラムとの連動も見据え、臨床研修センターと連携しながら課	通年		る。) ・附属病院臨床研修センターが主催する本学医 学科6年生向けの説明会に研究科長が参加し、大	・具体的な事項、キャリアプラン(研修医終了後2年間で実際に博士課程を修了できるのか等)を 慎重に検討してから進学することが必要。 ③令和5年度基礎研究医プログラムで、応募者あ り選抜。(附属病院職員課所管)	・臨床研修(基礎研究医プログラムを含む)や 専門医取得と大学院の両立が可能となる環境整備に関して継続して検討を行う

		Plan					Do	Check	Action
	i 枝 i 番	1 取組	2 課題	3 到達目標	時期	4 スケジュール 内容	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
C特色出し	3 1	イエンス研究科、国際マネジ メント研究科等との連携、外	・学際的に教育・研究の質を 向上させるため、国際総合科 学群大学院などとの連携のさ らなる強化	の開催を継続する	① 7② 211月③ 3 ④ 年⑤ 10⑥ 12月⑦ 後期 毎⑨ 通年	②・第2回セミナー(生命医科学研究科担当) ③・医学研究科講義「先端医科学研究科の自由科目として履修 ④・医学研究科教員による生命医科学研究科「医科学特論」講義 ⑤医理連携協議会の開催 (データサイエンス研究科との連携) ⑥ヘルスデータサイエンス専専博士課程早期履修制度を周知 (国総群研究科との連携)フォマティクス特講」の実施 ⑧・国際マネジメント研究科の	③「先端医科学研究概論」を生命医科学研究科の自由科目として履修可能とした。 ④ ①の連携セミナーを生命医科学研究科講義「医科学特論」として実施した。 ⑤医理連携協議会の実施、参加 ⑥⑦ヘルスデータサイエンス専攻学生、理学部からの卒業研究生に案内・募集の上、早期履修制度を実施した。 ⑦ヘルスデータサイエンス専攻との連携講義「バイオインフォマティクス特講」実施。生命ナノシステム科学研究科及び生命医科学研究科でも選択科目として単位計上する単位認定講義として受講を推奨し、開講。 ⑧選択科目「医療と経営(国際マネジメント研究科目を選択受講)」実施 ⑨八景Cおよび鶴見Cの教務関係者と連携し、次年度早期履修制度対象者へ案内を実施 ⑩データサイエンス研究科との更なる連携を模索し、研究科長間での打合せを実施した。研究科長間の連携アイデアについて、専攻会議および研究科代議員会で報告を行った。	③(生命医科学研究科学生による「先端医科学研究概論」令和5年度履修なし) ⑤医理連携協議会の運営により、生命医科学研究科と医学研究科との連携推進の課題や今後の方針について検討された。 ⑥⑦早期履修生 履修登録、講義実施(理学部実績3名、ヘルスデータサイエンス専攻0名) ⑧国際マネジメント研究科のソーシャル・イノベーション講義を昨年度に引き続き医科学専攻の選択科目とした講義「医療と経営」を開講した。(医学研究科学生履修6人) ⑨医科学専攻、データサイエンス研究科ヘルスデータサイエンス専攻、生命ナノシステム科学研究科学生を対象とする講義(バイオインフォマティクス関連講義)を開講した。(ヘルスデータサイエンス専攻学生履修0人、生命ナノシステム科学研究科履修なし、生命医科学研究科履修なし、生命医科学研究科履修なし、生命医科学研究科履修なし、生命医科学研究科履修なし、生命医科学研究科	る。 ・医学部研究室を卒業研究先として選択する学生に対し、医学研究科科目の早期履修制度の運用を継続して実施する。 ・R5年度に設置されたヘルスデータサイエンス専攻博士後期課程を含め、データサイエンス研究科との教育・研究連携について積極的に検討する。 ・データサイエンス研究科と医学研究科の更なる連携について、具体化できる事業を相互の会議体を経て相互に検討する。
	1	【グローバル教育】 グローバル化に対応する英語 能力の強化、留学生の日本語 の習得等も含めた支援環境整 備	化、講義スライドの英語表記 実施、受入留学生の日本語の 習得等も含めた支援環境整備	英語による専門科目により大 学院生の英語能力を強化する とともに、留学生の日本語の 習得等も含めた支援と環境整 備を行う	11月 ②5月~/ 月 ③10月~ 12月 ④通年 ⑤通年	 ②・大学院講義「バイオインフォマティクス実践(英語)」 ③・大学院講義「バイオインフォマティクス特講(英語・日本語)」 ④・大学院医学セミナーのスライド英語化 ⑤・事務書類の英文化 	目)」を継続して実施 ②「バイオインフォマティクス実践(英語による科目)」を継続して実施 ③「バイオインフォマティクス特講(英語による科目)」を継続して実施 ④「大学院医学セミナー」における講義資料 (スライド)の英語併記、または英語要旨配布を講師に依頼し実施(受講者次第で調整) ⑤RA手続書類や、外国人講師依頼時の口座情報手続書類の英文化(対象者者次第で調整) ⑥留学生向け科目「日本語」を継続して実施	・医科学専攻のみならず、看護学専攻や医学科学生にも聴講機会を周知した。 ②③大学院生の英語使用と理解の機会を提供した。(医学研究科学生履修 バイオインフォマティクス実践11名、バイオインフォマティクス特講7名)	力の強化に努める。 ・「英語プレゼンテーション法」は医科学専攻 のみならず、看護学専攻や医学科学生にも聴講 機会を周知、提供する。

				Plan			Do	Check	Action	
	枝	1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて	
	番	1 40/100	Z MVV	0 到是自然	時期	内容	3 次日代19477亿共作品入陆	0 190715	7 7 1 X O ANIEUCION C	
[2	【リカレント教育】 ①「YCU病院経営プログラム」との連携 ②医科学専攻修士課程職業訓 練給付金制度の継続実施	ニーズにあった教育プログラ	「YCU病院経営プログラム」 に関連する国際マネジメント 研究科講義について医科学専 攻選択履修科目として継続す る	①通年 ②通年	①国際マネジメント研究科講義を 医科学専攻の選択科目として継続 する。	席し、動向を共有する。 ②履修ガイドに記載の上、修士課程修了時には全員に書類を発行する。対象となる学生がいる場合は手続きできるように準備する。 (他)4月:文部科学省がんプロフェッショナル養成プラン第4期への申請(結果不採択)を経て、学内独自で継続するかの審議を行い、博士	②令和5年度に対象となる社会人(修士課程修了	学国際化担当)との連携を密に実施する。 ・職業訓練給付金制度を統括している看護学専攻担当と連携を密にし、対象者がいる場合には積極的な活用を促す。 (他)博士課程の中に「がんプロ対応コース」の新規募集を再開するため、がん総合医科学教室や看護学専攻と連携の上、カリキュラム上の準備を行う。インテンシブコース(学外者)受入	
	3	①入学定員充足率の確保 ②在学生の収容定員超過の抑 制管理(長期履修学生の管理	・臨床医(臨床研修医や病院 助教)の大学院入学や博士号 取得の促進が必要 ・社会人学生に対して長期履	・研究内容や経済支援制度の 充実(フェローシップ、RA、 臨床研修医や病院助教の大学 院入学)を継続的に周知 ・2025年度から変更される乙 号申請の必要要件について改めて周知を徹底する ・指導教員を通じた長期履修 学生への修了に向けた支援 (論文指導、学位申請に向けた計画指導など)	②通年 ③通年 ④通年	用した入試説明会(オープンラボ)の開催 ②・博士課程進学予定の修士課程4名を含む学内RA制度での支援 ③・R3年度より採択された文科省フェローシップ事業によって博士課程2年次から各学年3名をめどに研究奨学金にて支援開始とこれに関する学内の運用整備 ④・他大学の卒業研究生の受け入れを通じた大学院進学の促進 ⑤・R5年度から始動した厚労省臨床研	②5月~6月RA公募を実施し委嘱する大学院学生を決定した。 ③GP事業事務局と連携し、医学研究科におけるフェローシップの対象となる学生の選定及び奨学金関連事務支援を行っている。 ④他大学の卒業研究生の受入を継続 ⑤令和5年度から基礎研究医研修制度が新設された。(厚生労働省研修医制度:職員課所管) ⑥医学研究科代議員会(医系教授会)等による周知を行った。 (他)令和5年5月から7月にかけて、定員未充足解決のため、大学院進学推進のためのデータの集計・分析(5-7月)や研究科内アンケート(6月、7	①オンライン説明会参加申込者56人 当日参加者47人(内訳12教室:博士課程39人、修士課程8人) ②RA支援学生の採択を実施した。(博士8人、看護博士後期2人、看護博士前期1人計11人) ③フェローシップ事業に採択された医学研究科学生(令和3年度3人、令和4年度1人、令和5年度3名) ④他大学卒業研究生の受入(令和5年度4人受入→うち2人が本学修士課程へ進学予定) ⑤令和6年度に関しては複数応募あり選抜→定員1名決定。 ⑥医学系教授会によるリマインド、申請対象者に対してもWebサイトでの周知も行った。 (他)他大学データとも比較し、医科学専攻の大学院受入状況、学位審査要件などの振り返りを行っ	・学生間の交流、大学院生(特に修士課程)の 孤立解消に対する取組に関連して、学生が交流 できる機会を設けることも企図し、対面でオリ エンテーション実施予定である。	

			Plan	Do	Check	Action		
項 枝	1 取組	2 課題	3 到達目標	4 スケジュール		5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
目番	1 47/10	2 环烷		時期	内容	3 以音に同いた共体的状態	0 M.X	7 次千度 9 联船 (2 间) 7
A 教育	【教育の質向上】 ・ <u>論理的思考及びグローバルな視野の</u> <u>醸成と成果を発信する教育</u> を行う ・博士前期課程には「看護研究方法論 演習」を、博士後期課程には「看護学研究論演習」の新規開講により国際学会や国際雑誌への投稿スキルを向上させる ・大学院生が参加できる海外フィールドワークを企画する ・ChatGPT等の生成系AIを用いた教育の検討を進める	・年々、学位論文の質が向上している 一方で、在学中に学会発表、論文投稿 までできている分野とそうでない分野 がある ・博士後期課程では国際ジャーナルに 掲載が必須となっており、計画的な研 究遂行が必要である ・ChatGPT等の生成系AIの普及により 教育研究における取扱について検討す る必要がある	表、公表論文数が増加する ・大学院生の海外フィールドワーク参加者が2名以上いる ・大学院生の研究助成金の申請率・取得率が2022年度よりも増加する ・ChatGPT等の生成系AIの取り扱いについて検討を行い、方針が決定される	9月3月	・定期的に研究成果の公開状況(国内外での学会発表、論文公開)の調査を継続し、専攻教務・学生支援委員会にて分野所属学生の学会発表や論文公表実績について情報共有する・新規設定した博士前期課程「看護研究方法論演習」、博士後期課程「看護学研究論演習」の講義を開講する・ChatGPT等の生成系AIの取り扱いについて検討する・研究力強化につながるFD・SDを開催し、教員、学生が参加できるように周知する・フィリピンFW(5日間)にて、研究的視点や国際看護・助産学の視点を養う・国内外学会での発表数、国内外ジャーナルでの論文採択数を指標として実績を評価する	究指導を行い、学会発表と論文投稿に取り組んだ・博士後期課程では国際誌への投稿アクセプトが計画的に進められるよう指導教員が取り組んだ・生成系AIの取扱について医学部・医学研究科として決定し、学生に配信した・研究科内でFDを行い、有用性やリス	・ <u>今年度の学会発表数は20件</u> (修士9件、博士11件)、 <u>論文投稿数は25件</u> (修士15件、博士10件)で <u>前年度と比較して学会発表は17件増加、</u> 論文投稿は変化なし ・ <u>大学院修了生1名</u> が日本看護研究 <u>学会</u>	【教育の質向上】 ・論理的思考及びグローバルな視野の 醸成と成果を発信する教育を引き続き 行う ・博士前期課程には「看護研究方法論 演習」を、博士後期課程には「看護学研究論演習」の新規開講により国際学会や国際雑誌への投稿スキルを向上さ
B 研 1 究	【研究力の向上】※研究科のみ記入 A1と同様	A1と同様	A1と同様			A1と同様	A1と同様	A1と同様
5. C 特色出し 1 T T T T T T T T T T T T T T T T T T T	【特色を出す取組】 ・高度看護専門職教育のスムーズな運営と受験支援、充実を図る	・助産学分野は引き続き国家試験対応 と分娩実習の調整を行う必要がある ・周麻酔期看護学分野の特定行為研 修、OSCEともに予定通り実施したが、 人材および財源不足が明らかになった	・特定行為研修運営のために必要な人材、財源の確保について方針を決定する 【受験支援】 ・助産師国家試験を受験し、全員が合格する ・特定行為研修(術中麻酔管理領域) において、OSCEを実施し、受験した全	2月 4~8月	・助産学分野の学生の履修が計画通りに進むように環境を整える ・特定行為研修管理委員会及び専攻教務・学生支援委員会で検討し、大学院教育における特定行為研修の円滑な運営を行う ・特定行為研修運営員会にて人材、財源の確保について議論し、必要性を確認し、関係所管と検討を進める ・助産師国家試験受験を支援する ・専門看護師受験者を支援する ・専門看護師教育課程を検討し、新規申請する ・助産師の募集人員数変更に伴う文科省申請を行う ・保健師教育課程の大学院化に向けて検討を始める	た ・助産師育成、特定行為研修、CNS人材育成に各分野で教育、指導を実施した ・助産師募集定員増加にかかる文部科学省申請手続きを行った	門看護師・認定看護管理者の合格率は 約90%ととなった(9名中8名合格) ・特定行為研修(術中麻酔管理領域) において、OSCEを実施し、受験した全 員(4名)が合格した ・特定行為研修(末梢留置型中心静脈	再掲 【特色を出す取組】 ・高度看護専門職教育のスムーズな運 営と受験支援、充実を図る

			Plan			Do	Check	Action
項		2 課題	】 3 到達目標		4 スケジュール	┃ - 5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
	 【特色を出す取組】 ・リーダーとなる人材の育成とネット ワークを構築する 	・専攻における目標としてリーダー育成を掲げているが、修了後の活動は明確化されておらず、また教員・在学生との交流やネットワークも十分でない	·	時期 4月~ 3月	内容 ・修了生の動向調査を実施し、就職先や活動実績について、各分野から情報を集約する ・専攻教務・学生支援委員会が主導(教学IRと協同)しデータベース構築のための検討を行う ・看護系新センター(仮称)ワーキングと連携し人的ネットワークづくりの検討を引き続き行う ・専攻在学生・修了生の動向把握とネットワークづくりのためのデータベースを整備する	・大学院内で独自の修了生の動向調査を実施した ・看護キャリア開発支援センターの一事業として卒業生に関する人的ネットワーク作りのワーキングを設置運営した ・修了生の研究業績の報告ルールを検	 ・人的ネットワーク作りのため附属病院看護部と協働してYCU看護アルムナイ・ネットワークPJを立ち上げた・修了生の研究業績調査のルールを決定し、実態把握の基盤を作成した <到達目標達成> 	再掲 【特色を出す取組】 ・YCU看護アルムナイ・ネットワーク の構築と修了生の業績の実態把握する
	【グローバル教育】 l A1と同様	A1と同様	A1と同様			A1と同様	A1と同様	A1と同様
	【リカレント教育】 ・教員が行っている研究活動の可視化と、それを基盤としたリカレント教育を推進する ・科目等履修制度の充実を検討する ・研究員・研究生受け入れに関する周知を行う	・教員が個々に行っているリカレント教育が全体として把握したり、外部に対し教員の専門性がわかるシステムがない	・看護系新センター(仮称) について検討がなされる ・教員が行っているリカレント教育が把握される ・科目等履修生や研究員・研究生が増加する	4月~	・教員が行っているリカレント教育を把握するシステムを検討する ・教員が行っている研究活動を可視化し、外部からの依頼を受けやすいシステムを構築する ・HPの充実により周知を行う ・看護系新センター(仮称)について看護部と連携して検討する	・科目等履修生制度の充実検討として CNS科目の開放、横浜市職員への制度 拡大を検討した	・検討により <u>本学修了生を対象にCNS</u> 科目の科目等履修を認めることを決定した ・横浜市健康福祉局の要請および学内調整により横浜市職員に対して看護学専攻科目の科目等履修を可能とした ・2附属病院看護部へ大学院の開講講義で公開できる講義について情報提供することとなった ・検討が行われ、YCU看護キャリア開発支援センターの設置概要が決定した <到達目標達成>	再掲 【リカレント教育】 ・YCU看護キャリア開発支援センターを中心に教員が行っている研究活動の可視化と、それを基盤としたリカレント教育を推進する ・充実した科目等履修制度を広報する
D 共通課題	【研究科の定員管理と大学院進学率の向上】※研究科のみ記入 ・研究分野の充実・募集人員の増加を行う ・広報を充実する ・学部からの進学生増加のための学部 生対象の大学院広報を強化する	・2023年度入試で博士前期課程、博士 後期課程ともに定員割れした ・受験生の希望分野と引き受け可能な 分野のニーズディマントのマッチング のための検討と対策が不十分である	り上回る	4月~5月~	内英語試験特別措置を検討する ・オープンラボを実施し、受験生の個別相談対応により支援する ・看護キャリア開発支援センター会議に設けた 附属2病院在職看護師の大学院進学支援について検討を行う ・附属2病院からの今後数年間の受験希望者を把握し、相談窓口、フォローアップ方法を具体的に検討する ・高度実践看護に関して他大学との差別化を強調した広報を検討し、強化する ・新任教授による分野や研究分野を新設し、広	学院説明会を実施した ・学生募集要項を関係医療機関に配付した ・地域広報誌掲載(はまかぜ)や地域 ラジオ出演(金沢シーサイドFM)、日	・博士前期課程は第1期13名合格、第2期7名合格となり、定員25名に対しての 最終合格者は20名であった(前年度18名) ・博士後期課程は、定員6名に対して合格者は3名であった(前年度5名) ・令和5年度は博士後期課程地域ケアシステム看護学の再開、社会精神看護学研究分野の新設を承認した	

				Plan	Do	Check	Action		
項	枝		2 課題	3 到達目標		4 スケジュール	5 改善に向けた具体的取組	6 成果	7 次年度の取組に向けて
目	番	1 4次//旦	2 休恩	3 判廷口悰	時期	内容	3 以音に同りた英体的取組	0	7 次年及の収組に同じて
		【研究倫理教育】	・新倫理指針にそった研究指導が必要	・新倫理指針にそって遅滞なく倫理審	4月~	・博士前期課程「看護研究方法論」や博士後期		・各学生は新倫理指針にそって倫理審	
		・新倫理指針にそった遅滞ない倫理審	である	査を受審でき、倫理的配慮を行い、研		課程「看護学研究論」に関する講義で大学院生	・新倫理指針にそって各分野、研究分	査を受審した	
		<u> 査受審をするよう教育</u> する	・ChatGPT等の生成系AIが普及し研究	究不正のない論文を作成できる		に研究倫理を教育する	野内で倫理教育を実施した	・ChatGPT等の生成系AIの取り扱いを	【研究倫理教育】
	4	・ChatGPT等の <u>生成系AIを活用した教</u>	における取扱の検討が急務である	・ChatGPT等の生成系AIの研究におけ		・ChatGPT等の生成系AIの取り扱いについて検	・研究方法論に関する演習科目を設置	確認し方針に従って対応した	・新倫理指針にそった遅滞ない倫理審
		<u>育を行う</u>		る活用法や取扱について検討される		討する	し、論文作成の基本を指導した	<到達目標達成>	査受審をするよう教育する
					5月~	・各分野で研究倫理を踏まえた具体的な研究指	・生成AIの大学の取扱方針を決定した		
					3月	導を行う			